文部科学省　総合的な教師力向上のための調査研究事業
委託事業成果報告書

専門的人材活用事例の共有と活用システム構築に関する研究報告

（平成 27 年度）

札幌市教育委員会

札幌市立高校外部人材活用推進委員会

目　　次

Ⅰ．専門的人材活用事例の共有と活用システム構築に関する調査研究事業概要　1

１．調査研究概要
２．札幌市立高校外部人材活用推進委員会　開催概要

Ⅱ．外部人材の活用状況報告　18
１．各校における活用状況集約
２．各校における活用状況分析
３．具体的な実践事例における内容及び生徒への教育効果等

Ⅲ．試行実践授業等実施報告　28
１．試行実践報告書
２．試行実践参加者アンケートの結果と分析
３．試行実践協力者（外部人材）のアンケート集約結果
４．外国人特別非常勤講師の授業実践について
５．推進委員による実践報告

Ⅳ．先進事例状況視察報告　63
１．東京都教育委員会の視察報告
２．神奈川県教育委員会の視察報告

Ⅴ．専門的人材活用事例の共有と活用システム構築に関する研究の分析と提案　67

Ⅰ．学校のニーズ応じた専門的人材活用システム構築に関する調査研究事業概要

１．調査研究概要

（１）調査研究の目的

本調査研究では、平成 26 年度に実施した、市立高等学校各校における専門的外部人材の活用状況に関する実態調査の結果を踏まえ、各校において活用されている専門的人材の分野や実践事例を全ての市立高等学校及び中等教育学校で共有できるシステムの構築、また、各学校が具体的にどのような活用を希望しているのか、更には、現状として把握された専門的人材活用上の課題を克服するための方策を検討する。

また、こうした調査等の分析を継続しながら、活用すべき専門的人材の分野や活用基準、専門的人材に関する専門的人材の活用制度のシステムづくりなどにより、多様かつ質の高い教育環境の実現に必要となる専門的人材活用の仕組についての調査研究を行うことを目的とする。

（２）研究の期間

平成 27 年４月１日から平成 28 年３月 31 日まで

（３）研究の体制

札幌市教育委員会学校教育部教育課程担当課長を推進委員長として、市立高校外部人材活用推進委員会を設置し、調査研究を推進することとした。また、市立高等学校及び市立中等教育学校後期課程の教諭、キャリア教育分野、外国語分野、学問分野のそれぞれの分野の専門家に推進委員を委嘱し、調査研究を行った。

また、本調査研究の推進委員会事務局として、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会に事務局補助業務の委託を行った。（推進委員一覧は、次頁参照）

（４）調査研究の経過

平成 27 年　６月	市立高校外部人材活用推進委員会設置
	推進委員募集及び委嘱
７月	第１回市立高校外部人材活用推進委員会開催
９月	市立高校各校における活用実践状況の報告依頼
	外部人材活用試行実践（授業等）の募集
	第２回市立高校外部人材活用推進委員会開催
10 月	市立高校各校における活用実践状況集約および分析
	第３回市立高校外部人材活用推進委員会開催
10～２月	試行実践の実施及び参加者・協力者アンケートの実施
12 月	先進事例状況視察（東京都教育委員会、神奈川県教育委員会）
平成 28 年２月	第 4 回市立高校外部人材活用推進委員会開催
	試行実践の考察及びアンケート結果の分析
２～３月	今年度の調査・研究内容の考察及び報告書（事例紹介含）作成

市立高校外部人材活用推進委員会　委員一覧

役　職	所属および職名	氏　　名
委員長	札幌市教育委員会学校教育部教育課程担当課長	長谷川　正人
副委員長	市立札幌大通高等学校長	佐々木　雅男
委　員	市立札幌大通高等学校教諭	蒲生　崇之
委　員	北海道札幌啓北商業高等学校教諭	添田　裕一
委　員	市立札幌開成中等教育学校教諭	黒井　　憲
委　員	北海道札幌開成高等学校特別非常勤講師	ラケッシ・ディクセット
委　員	札幌市生涯学習センター事業課学習企画係 学習企画アドバイザー	岩本　　隆
委　員	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 青少年担当課長	松田　　考
事務局	札幌市教育委員会学校教育部教育課程担当係長(指導主事)	廣川　雅之
事務局	札幌市教育委員会学校教育部教育課程担当係長(指導主事)	幸丸　政貴
事務局	公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 札幌市若者支援総合センター相談担当	松本　沙耶香

平成27年度　第1回市立高校外部人材活用推進委員会　議事録

日　時	平成27年7月27日（月）15:30～17:30
場　所	札幌大通高等学校　111室
参加者	佐々木副委員長、蒲生委員、添田委員、黒井委員、ラケッシ委員、岩本委員 幸丸係長、廣川係長、松本事務局員

１．開会

２．委員長挨拶

３．委員自己紹介

４．委員会設立の趣旨および今後の業務の流れの説明

（１）事業の進め方（配布資料参照）

- 本年度の委員会は４回の実施を予定。
- 各学校を対象として、実践状況についての調査を実施、外部人材を活用した授業等について、既に実践及び計画されている取組の視察、新たに募集する試行授業を実施し、事例集を作成し、各校へ紹介したい。
- 今後の各学校や各教員の取組が向上するよう、外部人材登用 システムの有効な方策について、検討したい。

５．議題

（１）昨年度の調査研究結果の確認

- 昨年度末の報告段階では、目標としていたデータベースづくりよりも、27年度は各学校が参考にできる事例集を作成することで、外部との連携を推進していくという方向性が示されていた。
- 外部人材を活用する際のコーディネートシステムについても、本委員会で引き続き意見を出していく。

（２）調査研究「事例集作成」へ向けた方針及び方法の決定

１）意見交換

①外部人材活用について

- 人材発掘の部分は、初めは個々の繋がりから始まるものだが、組織として持続した取組となるシステムにするため、必要な要素について整理する必要がある。
- 学校が外部と連携する理由を示す必要があると思う。学校の教育目的と合致していることが理想。
- 継続しているプログラムは、互いにメリットが見受けられる。双方にメリットがないと継続しない。
- 全体のニーズ、学校のニーズを全て満たした人材を前提にするとフットワークが重くなる。
- 本当はどの学校でも活用できると思うが、人材側の見方では、フットワークよく対応可能な学校が協力しやすいと思われているのではないか。
- ある程度具体的なプログラムとして形ができていると、他の学校にも活用できると考えられる。
- 費用のかからないやり方もあるが、昨年度調査の教員の意見では、費用についての課題が伺えた。

- 人材のコーディネートの点では、８校全体のコーディネーターがいれば積極的に活用できると思う。
- 実際には、予算と人材の両方が必要であり、コーディネーターの条件としては、市立高校の事情も熟知し、フットワーク軽く動ける人が有効だと思う。
- すでに、地域や人材についての情報を持っている機関がコーディネーターを担えるのではないか。

②事例集づくりについて

- 事例集への掲載は、失敗事例ではなく継続的に活用できる成功事例であることが望まれる。
- 授業以外で行われている事例も、既存の何らかの科目に当てはめることが検討できる。
- 学校から実態把握調査を行った際に、恐らくキャリア教育、体験に関わるものが多いと予想される。
- 各学校の実践の数や内容を集約し、どういう事例をまとめていくのかを検討しなければならない。
- 夏季休業中に各校へ案内し、次回の会議で調査結果を協議したい。

２）調査項目の検討について

- 実施に至る経緯やきっかけが明確になると参考にしやすい。
- 生徒や担当教員の変化（実施前と実施後）、効果として期待することがあるとよい。
- 昨年度は部活動やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーを除いて調査を行ったが、本年度は部活動については特に触れず、実際の取組について、自由に書いてもらう。（部活動外部指導者は、各校でも６名以下の実態からあえて対象から外すことを伝えなくても影響はないと考える）

（３）推進委員による人材活用実践状況と各校の状況について

１）啓北商業高校での取組について（添田委員の実践）

①取組の概要

- 商業の科目「商品開発」の中で、昨年から行っている札幌軟石の取組に絡ませて、石の商品化に向けて、外部人材を活用しながら授業を進めている。
- これまでに、札幌軟石の歴史と活用について学習し、これから、生徒が創った作品をデザインの先生に評価していただく予定。販売もいずれ目指していきたいが、今年はじめて取り組み、対象は３年生の生徒なので、何か売れるものを「つくる」ところまでになりそうだと予想している。

②外部人材活用のきっかけと連携先

- 最初は教員が専門家からの指導を受け、生徒に間接的に教えることを考えたが、直接生徒に教えてもらう方が面白さも伝わると思い、来校してもらうこととした。教員だけでは難しいことや校内では相談しても解決できないことを外部人材に協力してもらいたいと考えた。
- 「商品開発」の授業は、教科書の説明を中心にするだけでも良い内容にできると考えていたが、実際に携わっている人に来てもらい、特に担当する教員に専門性がないデザインに関しては、専門の方に来てもらうことも有効だと思った。
- 元々は生徒が関心を示しそうな菓子やパンづくりに関するものを考えたりもしたが、調べてみると、高校生が考えるようなパンは既に販売されていることが多い状況がわかった。学校評議委員にも、学校のある“南区”“石山”でできることを勧められた。学校から見えるところに、札幌軟石を使って建てられた住宅があり、ちょうど札幌軟石に関する記事を生徒が発見したのもきっかけとなった。
- 近郊にある東海大学のデザイン学部で同様の授業を行っていた（授業で商品化し、販売も行っている）ので、大学とも連携することとし、現在では、石材店とも連携しながら進めている。実際に札

幌軟石を商品化している方にも協力いただいている。

③予算措置

- 少額ではあるが、謝金を支払っている。

④成果や評価

- 授業での継続性を考えると、大学の先生であれば継続した計画ができそうだが、それ以外の方は授業の中で継続的にというのはスケジュールを合わせるにも難しさがある。
- 生徒は楽しんで取り組んでおり、教員では考えられないようなアイディアも出ている。
- 実際に取り組んでみると、商品開発に関することは想像以上に時間がかかるものだと実感している。

２）開成中等教育学校での取組について（黒井委員の実践）

①取組の概要、外部人材活用のきっかけと連携先

- 放課後活動として、地域国際交流班というのがあり、地域と連携して活動を進めている。
- 一つ目は、プレゼンテーションプログラムで、TEDxSapporo と連携して取り組んでいる。約 20 名の生徒が参加。
- 二つ目は、「おまつりプロジェクト」。伝統的なお祭りを学校が連携してつくるもので、地元の栄町商店街、大谷大学と連携している。約５名の生徒が参加。
- 三つ目は、食育プログラム「アニマドーレ」。コープと NPO 法人“のこたべ”と連携して取り組んでいる３カ年のプロジェクト。15～20 名の生徒が参加。札幌の子どもは食に対する意識が低く、食に関心がないのが課題で、触れる機会がないのだと気づいた。高校生や親に食育に関心を持ってほしいこと、そしてそれを全国発信し、食育が産業化できればビジネスにもなるという共通意識が発端。１回目は恵庭の農園で野菜を収穫してピザを作り、２回目は収穫した野菜をパッケージ・販売する体験をした。最後は、農園に行ってピザを作って一般の人に食べてもらう活動を予定。北海道でピザ甲子園を実施したり、ご当地ピザを高校生チャレンジグルメコンテストにも応募しようと思ったが、そこまで手が回らなかった。NPO 法人“のこたべ”では、校正・編集の仕事もしており、生徒が行った農家インタビューを一つのページにしたり、校正・編集の講義やマーケティングの講義もしてくれたりする。
- 四つ目は、起業家育成クラウドファンディングの取組を行っている。

②予算措置

- 無償もしくは、資金援助をしてくれている。企業や地域のニーズに対して学校が協力する形での実施。交通費や昼食代、イベント参加費も出資してくれている。事前指導のための来校も無償。

③成果や評価

- プログラムとして魅力あるものをつくることができている。
- 外部の方と良い連携ができるとともに、良いアイディアをいただいていると実感している。
- 例えば、生徒は１時間かけて「モノ」を売る中で、最初はできなくても最後の 20 分でできるようになるなど、目まぐるしい変化が見られる。
- この活動があるのでこの学校に来てよかったと言う生徒もいる。
- これらを日頃の授業でやろうとしてもその余裕がないため、放課後を使いながら、企業とこちらの

ニーズをコーディネートしてプログラムを作っている。教員がこの調整をすることは難しく、一人の教員が担当するのは酷な仕事。反省として、今は自分がいないと回らない状態にある。

- 活動の場やモノの提供など、学校のニーズに対して、企業が応えてくれているが、外部の方にも大きく負担にならないようにしている。
- 企業が出資してくれているので、学校から報告書を出さなければならないこともある。
- 「やりたい」を受けてどう形づくるかが課題で、各学校 1 人でもコーディネーターとなる人材を確保できれば更にうまくいくと思う。

３）大通での取組について（蒲生委員の実践）

①取組の概要、外部人材活用のきっかけと連携先

- 一つ目は、大通まちづくり株式会社との連携事業があり、イベントで小学生がお店体験をする際に、高校生が小学生の PR に行ったり、当日小学生のサポーターについたりする。教員が生徒を募集するのではなく、企業の方が、説明や打合せなども直接生徒と行っている。
- 二つ目に、開校３年目から地域 FM の番組を放送させてもらっているが、最初の会社からは縁を切られてしまった。

②成果や評価

- 生徒とのやりとりを企業が直接行ってくれていると、教員は状況を把握するのみでよい。
- 実施の目的などを、互いに共有できていないと、継続できなくなる。

４）今年度の実践例視察について

- 実態把握調査結果をもとに、授業等を実際に視察できるかを検討していく。
- 他都市の事例についても、積極的に情報を集めていく。

（４）試行授業等の取組について

- 再度各学校にも案内をしていくが、既に校長会において行った説明時の印象では、応募してもらえる可能性も高そうだと感じた。

６．その他（連絡）

（１）平成 27 年度教育課程担当課からの発出文書（配布資料）

（２）次回の委員会日程について

第２回推進委員会までに市内各校へ事例実態把握調査を終了し、結果を共有・検討する。

８月 24 日～９月 11 日の間で実施予定（別途メールにて調整）。

７．閉会

平成27年度　第２回市立高校外部人材活用推進委員会　議事録

日　時	平成27年９月10日（木）15:00～17:00
場　所	札幌大通高等学校　111室
参加者	佐々木副委員長、蒲生委員、添田委員、黒井委員、ラケッシ委員、岩本委員、松田委員 幸丸係長、廣川係長、松本事務局員

１．開会

２．委員長挨拶

３．平成26年度の教員アンケート集約結果による実践状況について

〔配布資料：外部人材活用状況一覧〕

昨年度の本委員会の研究目的の一つにシステム構築の検討を設定していたが、アンケート集約結果から外部人材側の意見として、「掲載してよい」、「掲載してほしくない」、「掲載できない」と意見が分かれ、また、リスト化された場合の取扱も課題の一つに挙げられていた。今年度は、その結果を踏まえ、外部人材活用を推進するための方法として事例集をつくり、まず、その情報を共有することから、外部人材を活用の推進することとしたい。

４．議題

（１）事例集作成イメージについて

１）外部人材活用状況調査について

- 改めて学校に実態調査を依頼するにあたり、業務負担を増やさずにできる良い方法はないか。
- 各学校から近年の取り組みの中で、お勧めの事例を出してもらってはどうか。
- 委員の事例の他、各学校からピックアップしたものをいくつか紹介したい。

〔配布資料：平成27年度外部人材活用状況（予定）一覧の項目〕

- 協力者への依頼内容（役割・業務）：助言（アシスタント）なのか、講師やコーディネーターなのかなど、どこまでの役割・業務を依頼しているのかが分かるようにした方がよい。
- 協力者人数：一覧の項目から削除
- 実施形態：教育活動外の項目の追加
- 実施形態：授業講師、講演講師、実技指導などの分類項目の設定
- 部活動：対象としない

〔決定事項〕

- 平成27年度外部人材活用状況（予定）一覧を、各学校の共有フォルダに集約データを保存する方法などにより、期間を設定するなど各教員の負担の少ないデータ入力などを提案。
- データ発出の方法は、Excelブックで学校ごとのファイルを作って入力してもらう。
- 改訂版を各委員にメールで送信し、確認していただく。

２）事例集の内容について

<u>リストの内容について</u>

- 事例集に詳細も含めて掲載するのは３～４事例でよいと思うが、現在行われている分野、タイ

トル、内容等について、できる限りの数を把握してリスト掲載し、外部人材を活用できる場面等については、事例集を見た人が、学校間や教員間でやりとりできる材料に活用できるとよい。

- どういう協力者が市立高校に入っているのかや費用面が見えてくると、活用しやすいと思う。
- 去年のアンケートから見ると、興味を持った場合に問い合わせできる先は、協力者ではなく、教員個人名が分かると活用しやすく、教員個人から実際の状況を見聞きすることができそう。
- 教員個人名を出すことが難しければ、教科で実施したのか分掌で実施したのかなど、その状況が分かると問い合わせがしやすいかもしれない。
- 学校内だけでも、できれば個人名も入ったリストが欲しいと思う。
- 学校の事情によってどのような枠で実現し得るかは異なるが、内容や協力者がどのような人たちなのかについての詳細を知ることができれば、活用の際の参考にできる。
- 外部人材活用の入口段階の人が、最初の壁を乗り越えられるための材料にリストを作りたいが、その際に必要な項目を設定したい。

担当やコーディネーターについて

- 効果的になるのは、事例集よりも人との繋がり、特に卒業生との繋がりであれば他の学校では難しいこともありそう。学校からの問い合わせ先が個人でも担当部署でもコーディネーターでもいいが、繋ぐ役目になる情報は必ず必要になる。
- 市は図書館の利用啓発で多くの外部人材を使っているが、コーディネーター役は配置せず、市教委の担当が担っている。また、スクールカウンセラー派遣についても、配置のコーディネーターは市教委担当者になっており、専属のコーディネーターを配置できた例はほぼなく、予算獲得も難しい。予算があっても学校が満足できるコーディネートにならないこともある。
- コーディネーター役も誰でもできるわけではないので、コーディネーターのためのマニュアルがあればいいのだろうか。
- 「高大連携」でも、具体的にどのような連携で、イベント的な連携や継続的な連携の違い、教科主体や分掌主体での取組の違いを明らかにした方が良さそう。

活用方法について

- 開成高校では、夏季休業期間に、学校の SGH の取り組みで、グローバルリーダー研修を合宿で行った。コンサルティング会社と JICA、環境省の協力によるもので、ディベートについて深める内容だった。この実践をそのまま他校での実践へという可能性もあるが、今後、開成高校で行う実践に、他校の生徒も参加できるようになると可能性も広がるのではないか。
- これから取り組みたいと考える人にとっては、どうしたら組み立てられるのかを知ることで、自分の学校に読み替える参考になるだろうし、同様のプログラムは難しくても学校間の連携で学校を越えて参加する仕組みを作るという両方の可能性がある。
- 事例を見て自分たちの学校では、すぐにできなくても、実施の方法を知ることや、場合によっては学校を越えた参加の可能性が広がれば良いのではないか。
- 教科を飛び越えて何かをやろうとすると外部人材が必要となり、さらにはそのことが様々な教科に関連付くものになる。今の仕事の負担軽減ではなく、新しいことをやろうとすることの負担軽減に役立つものなのではないか。今行っている農業体験も、各教科にも落とし込んでていくことができると思われる。
- 教科の学習活動に関するニーズは、各先生がプロフェッショナルなので、必要があれば外部と

も繋がることができるのだと思う。ただし、教科の枠を飛び越えるときに、どうしたらいいのか途方に暮れるのではないか。その時に情報が提供されると非常に参考になるものになりそう。

- 新しいことを紹介することで、積極的に情報を求めていない場合でも面白いと思ってもらえるのではないか。
- コミュニティスクール事業を受託した際の調査では、生徒の自己肯定感のアンケート調査を行ったが、全校でも最高で 60%というあまり高くない結果が出た。プログラムを入れることで何が変わるのか、「こうした課題に対して何をやったらどうなった」という事例があれば読んでもらえるかもしれない。
- 面白い取組の組み立て方をモデル事例として示すことは大切だと思う。
- 教科に限らず、先生自身が「やりたい・勉強したいこと」から始められるのではないか。実際に、民間企業のプレゼンテーションについて知りたいと考え、生徒に放課後に教えていただいた。教員自身も非常に面白いと感じられるし、生徒と一緒に勉強することができた。
- 昨年度の調査で回答のあった取組の中には、掘り下げる価値がありそうなものもある。誰でもできることを紹介できる、参考になる事例を示していきたい。

３）その他

- 何らかの取組に興味があったら、最初の連絡は学校にするのか、直接協力者に連絡するのかなど、リストの使い方と伝え方を検討する必要がある。
- 外部の人材を活用することの効果には、教育内容の充実と教員の負担軽減があるが、学校からニーズがないと事例集があっても活用されないのではないか。各学校の特色から出てくるニーズと、全般から出るニーズの両方があるだろうし、全国の先進事例も重要になりそう。
- 教員の考えているニーズと生徒が考えているニーズ、市立高校が考えるニーズがあると思うので、どう使い分けるべきか。
- 人材リストがうまくいったとして、その人が継続的に活動しているかどうかも分からないし、継続性については、学校だけではなく地域の人材自身も活動継続が綱渡り状態の場合もある。地域の活性化も図れるとより良いと思う。
- 委員が取り組んでいる実践は事例集に掲載し、紹介するようお願いする。

（２）視察授業の検討について

- 試行実践を中心に、外部人材活用状況調査を参考にしながら、可能なものについて、視察を行いたい。（視察の出来ない試行実践は報告書を提出してもらうよう依頼）
- 委員担当の事業で視察見学が可能な日があれば日程等を別途知らせてほしい。

（３）試行実践の募集について

- 本事業の中に試行的取り組みがあるが、それを活用して複数の事業を実施して効果を測ることができれば。
- 試行実践を募集してもすぐに手が挙がらず、今はまず活用例を広めていく段階にある。

〔決定事項〕

- 委員自身も外部人材を活用する事例があれば、本事業を積極的に活用していく。
- 昨年度は校長会での口頭説明で終わっていたが、今年度は、活用方法も含め、文書で通知し、総合的な学習でも学年の取り組みでも活用できるようにする。

（４）先進的事例視察について

- 三鷹の事例：外部人材システムを回していく仕組み、依頼する基準もあり、提案可能なシステムがあれば、資料を得たい。

〔決定事項〕

- ①事例を載せられる他都市への視察、②システム的に参考になる都市へのヒアリング、③その他関心のある取組への視察について、具体的な情報・アイディアを集約する。

※情報の締切：９月 25 日（金）までにメールにて事務局へ

５．その他〔決定事項〕

- 次回会議までの予定は、①調査内容の意見を委員にメールにて伺う、②外部人材活用状況調査実施、③調査結果まとめ、④それをメールにて事前に見ていただいた上で次回会議を行う。
- 次回会議日程：10 月 21 日～30 日までの日程で、別途メール調整を行う。

６．閉会

平成27年度　第3回市立高校外部人材活用推進委員会　議事録

日　時	平成27年10月22日（木）15:00～17:00
場　所	札幌大通高等学校　111室
参加者	佐々木副委員長、蒲生委員、添田委員、黒井委員、ラケッシ委員 幸丸係長、廣川係長、松本事務局員

１．開会

２．委員長挨拶

３．開成高校（ラケッシ委員）の授業視察報告

（１）実施日：10月９日、16日の計２回

（２）視察者：佐々木副委員長、松田委員、幸丸係長、廣川係長、松本事務局員

（３）視察者の感想

- テキストを使いながら全て英語で授業が行われ、生徒もそれに対応できていた。生徒が英語で話せるよう先生が促されているのが印象的。
- 言葉の特性の違いなのか、good という言葉が繰り返し使われており、日本人の先生ではあまり見慣れない光景が非常に新鮮だった。
- 生徒みんなが集中して、楽しそうに参加しているのが印象的。
- 生徒が自分の意志を伝えたいという様子が見て取れた。
- 生徒同士も互いの言葉を真剣に聞いており、お互いにフォローし合っているのが印象的。
- 外部人材という観点からは、普段との違いをどう捉えるべきかが難しいところ。
- アンケートからは、生徒からも『発信型で楽しい』ということが述べられ、また、「生徒への気配り」の項目は、全ての生徒が〇を付けていたことからも、先生の配慮が窺える。

（４）授業を実施する側として（ラケッシ委員）

- テキストから生徒にとって身近な話題を引き出すことを意識して授業展開している。身近な話題は生徒の興味が沸いてくると実感している。

４．議題

（１）アンケートの形式について（配布資料）

- 実践した授業については、他の先生との比較をするものではなく、外部の方が入ったことで授業内容に興味を持てたかどうかを聞くものにしている。
- アンケートの記入は、５分程度で書ける分量にした方がよい。

〔決定事項〕

- 「普段受けている授業」の捉えについて、誤解を生じないような説明を付加し、本事業の試行的取組等においてアンケートを実施していく（学校との調整は事務局）。

（２）各学校からの活用状況報告について（配布資料）

１）報告資料について

- 現時点では、全校合わせて 151 件が報告されたが、５名の外部講師が関わった授業を一つとし

て記載されているものもあれば、同じ授業でも講師ごとに記載されているものが混在している。

- 今後も追加で活動状況報告が届く可能性あり。
- コーディネートは一人の先生により、分掌や教育課程に位置付いたものでの実施が窺える。
- 予算のあるものについては、様々な取組が可能になっている印象がある。
- 総合的な学習の時間や特別活動での活用は多いが、教科の授業としての継続的取組は少ない。

２）今後行われる授業の視察の検討について

① 大通高校（蒲生委員）：ジョブトレーニング、ソクラテスミーティング、コーピングリレーションの授業がある。

② 啓北商業（添田委員）：札幌軟石の授業をあと１回実施するが、まとめになるので外部人材活用の特徴的な内容とはならないかも知れない。

③ 開成中等（黒井委員）：10 月より計３回、国際交流班（放課後ユニット）で北海道大学の留学生 20 名との文化交流がある。毎年実施しているもので、留学生は日本語の授業の一貫。２回目以降は前期課程の生徒も参加する予定。10 月 28 日（水）、11 月 18 日（水）、12 月 21 日（月）各 16 時半～17 時半。

３）開成中等：食育プログラム「高校生アニマドーレプロジェクト」レポート

- 今年度の振り返りと今後に向けた話し合いが終了し、大通高校とも交流しながら進めていきたい。
- 本プログラムをきっかけに市立高校全体に広がればと考えている。
- 単位認定の可能性や、複数の学校にも広がり得る、価値のある実践例。

４）啓北商業：札幌軟石の授業

- 校内でも外部との連携、通常の科目と違う部分は新しい取組であるため、校内でも少しずつ広げていきたい。

（３）試行実践の応募状況（配布資料）

① 大通高校：DORI-TRGP 研究会：コーピングリレーション授業に向けた準備段階のコミュニケーショントレーニング（10 月 24 日）。

② 新川高校：ディベート活動（10 月８、28 日、11 月５、12、28 日の全５回）

③ 大通高校：多文化共生講座

④ 清田高校：選挙権年齢の引き下げに関わる授業の打診あり。３月入試終了後に実施予定。※実施報告書の提出が間に合うのであれば、試行実践として承諾し、実施してもらう。

（４）先進事例視察（配布資料参照）

１）かながわハイスクール人材バンク：予算は文科省 5 千万、県費１億で実施。依頼型ではなく、登録制で仕組みづくりを行っている。マッチングの課題があり、学校の希望と登録している人材がニーズに合わない場合や、登録しても依頼がない場合がある。コーディネーターは退職校長２名を県が雇用している。外部人材については、月４回活動する場合は非常勤扱いで、それ以下の場合はボランティア扱いとなっている。

２）いわき市：地域ぐるみで学校運営を支えている取り組み。義務教育中心だが、システムの参考に

はなりそう。

３）埼玉県彩校応援団：人材募集窓口をワンストップ化している取組。

４）講師バンクの取組事例：北海道教育委員会、東京都、大阪府。

５）専修大学付属高等学校「杉山比呂之先生の実践」：学校に地域の方を招き、子どもたちのために学校で何ができるのかをワークショップ形式でつくり、実践している。外部人材と一緒に授業づくりをするノウハウをもち、実績がある。外部人材から更に新しい人材へと輪が広がっている。杉山先生のファシリテート力が非常に強く、２時間のワークショップでも参加者にストレスがなく、主体的に参加している様子がある。学校設定科目で土曜日に行われている授業。外部人材に協力してもらいながら、外部人材とどう関わっていくかを提示するには良い事例。また、同校には、アクティブラーニングで有名な皆川雅樹先生もおり、学校運営に参考になる事例が多くあるのではないか。

〔決定事項〕

●神奈川県への視察：岩本委員、廣川係長の訪問で調整。

●専修大学付属高等学校：黒井先生ほか１～２名の訪問で調整。

●他にも希望があれば、別途調整する。

（５）実践の報告様式について（参考資料：千葉県外部人材活用事例集等）

- 今年度既に終了したものも含めて紹介事例を考えていく。
- 教員の資質、力量向上に繋がる事例を紹介したい。
- 視察する授業については、どの程度の報告書作成を学校にお願いできそうか検討する。

〔事例集の掲載項目〕

- なぜやろうと思ったのか、どういうきっかけで繋がったのか。
- 実践のコンセプト、具体的な外部人材像、実践の成果。
- 学校の連絡先（分掌）
- カテゴリー分け（例：講演なのか科目授業なのかなど）

〔決定事項〕

●事例紹介は、１事例Ａ４両面１枚程度にまとめる。

●蒲生委員、黒井委員、添田委員の実践は事例集に入れたいので、次回会議頃を目安にＡ４両面１枚程度にまとめていただく。

５．その他（連絡）

次回会議日程：１月実施予定で後日メールにて調整。

〔今後の予定〕

- 活用状況報告に挙がっているものの中から選択し、学校と調整を行ったうえ、委員へ別途連絡する。
- 次回の会議では、各種資料をもってまとめの会議を行い、「教員の資質向上につながる外部人材の活用」について意見をいただく。
- 本事業に関する参考情報は今後も随時事務局へ連絡いただく。

６．閉会

平成27年度　第4回市立高校外部人材活用推進委員会　議事録

日　時	平成28年２月２日（火）15:00～17:00
場　所	札幌大通高等学校　111室
参加者	佐々木副委員長、蒲生委員、添田委員、黒井委員、ラケッシ委員、岩本委員 幸丸係長、廣川係長、松本事務局員

１．開会

２．委員長挨拶

３．報告

（１）試行実践等実施状況報告（配布資料参照）

- 全校で募集したところ、４校８講座の申請があり実施。各講座担当者から報告書を提出してもらっているほか、生徒向けアンケートも実施している。
- 日頃の授業の中に外部人材活用をしているというより、講演スタイルのものが多い。日頃の授業の中での活用に限定をすると、応募が少なくなったことも予想される。
- 全ての取組で、生徒アンケートからみても、外部人材活用の効果があったと言える。

（２）道外における先進事例（東京都教育委員会・神奈川県教育委員会）視察報告（配布資料）

札幌での外部人材活用の実践は個人に紐づいたものが多いが、人材の発掘についても本事業の課題になっている。東京都教育委員会及び神奈川県教育委員会の視察を経て、札幌市立高校の規模で考えると、人材バンクをただ作っても機能しないことが予想される。札幌の実践に合致するシステム構築の案として次のことを挙げる。

（仮称）「学校版コンシェルジュ」制度の構築（案）

①学校のニーズを的確に把握するため、市立高校の事情に精通した人材がコンシェルジュとして活動できる組織を設立。

②必要に応じて必要な人材を学校につなぐため、学校版コンシェルジュと連携できる協力団体・個人とのネットワーク構築を重視。（現在の特に個人に紐づいている取り組みは今後も継続するが、やりたくてもできなかったことを実現するシステム）

③コンシェルジュ機能をもつ組織をNPO法人化することで、市立高校を応援してくれる市民等からの寄付制度等を活用した持続可能な体制を構築。（市立高校のネットワークの中に位置付けたい）

（３）清田高校からの試行的取組への対応について

試行実践の募集は２月までに実施できるものとしていたが、清田高校より３月に実施される講座の希望があった。実践報告については、３月作成の報告書に組み入れる形で実施を承諾したい。

（４）推進委員の授業実践報告

1）開成中等：アニマドーレプロジェクト

- デザイナーの協力を得て広告をつくり、広報誌「ちょこっと」でも紹介していただいた。次年度に向けても継続したいと考えているところ。授業化の動きとしては、SSH としてという案が上がっているが、具体的な段階ではない。
- 次年度は大通高校も一緒にプロジェクトを行っていく予定。大通高校では単位認定で検討中。

2）大通：“たまりんぱ”との共同実践

- ２年間の実践をまとめる予定。特別支援ではないが、手が回っていない層の生徒の支援の場になっている。

3）啓北商業：札幌軟石の授業

- 授業がすべて終了し、アンケートの結果を含めて生徒の変化も見られ、当初から目的としていた「大人との交流」「コミュニケーションをとる」という点で成果が見られた。
- 多くの方に様々な形で協力していただくことができ、普段と違う生徒の姿、発言が見られた。潜在的な生徒の能力を少し引き出せたのかもしれない。

４．議題

（1）試行授業実施後のアンケート集約分析（配布資料参照）

- アンケートの傾向として、普段の授業との違いとして、実体験や専門性に基づいた授業で、興味関心を惹いたと回答している生徒が多い。

（2）今年度の調査研究成果報告書の作成について

1）今後の予定

- 目次原案（配布資料参照）をもとに、３月完成予定。
- ３月の最終校正前に、委員にも原稿を確認していただく。

2）議論：外部人材活用における「教師力の向上」について

- 外部人材活用の場面では、コーディネート能力が不可欠。授業のねらいはあるが、マンパワーが足りずに取り組めず、外部の力を活用して実現するという部分は共通している。普段と違う授業なので一生懸命聞いたという声もある。なぜ特別な企画を入れたのかという意図を伝えられるようになると教師力向上につながるのではないか。
- 民間で仕事をしている人は、１回のプログラムで、失敗すると次がないという感覚が強い。教員は挽回できるチャンスがあると考え、この部分を甘くみてしまう傾向があるかもしれない。生徒の行動の変化を項目立てして、このプログラムで目的が達成できるのかという観点で向き合うなど、外部の方が、徹底的に考えてくれるところが大きな刺激になり、こうした視点で、ものづくり、プログラムづくりをしていくことが大切だと感じた。
- 教員側に知識がないところを外部人材に埋めてもらった。自分の思い通りにはならないし、自分が間違っている可能性もある。外部人材からの刺激は活用の醍醐味なのだと思う。教師自身の成長よりも生徒の様子・変化に関心が向きがちである。
- 周りの教員も興味は示してくれているので、波及効果も少し与えられたのかもしれない。
- 生徒は日頃接している教師に甘えてしまうので、変化そのものを感じ取ることは難しいが、生

徒たちは、外部の方と接する中で、先を見ながら考えることができるようになったと感じている。商品を作ることがメインの取組でも、助言をしてもらうことでの気付きがある。

- 生徒アンケートの結果によると、「役立つ」「興味・関心をもてた」「理解が深まる」という意見が多く出てきている。授業において、生徒の興味・関心を引き出すことが一番難しく、違う立場の人が入ることで、刺激になっているのではないか。
- 違う立場の人が入ることによる刺激なのか、進め方がうまいのかでいうと、刺激の方が強いのだと思う。年間を通じてうまく活用することで、生徒の興味・関心を引き出せるのではないか。
- 生徒は教員に親近感があり、いわば家族のようなところに、外部の人が入ると客のような感じになる。お客さんと接し、挨拶する際に、こんな風にできるようになったと感じる親がいる。生徒にとって先生がいつも言っていることを、外部の人にも同じことを言ってもらうと安心感が生じ、違うことを言うと違う視点を知り、社会を知るという経験になるのではないか。教員にとっても生徒の反応は勉強になり、次の対応のヒントになると思う。教員は外部人材にはなれないので、刺激と成長を繰り返していくのだろう。

（３）人材活用システムの検討について～「学校版コンシェルジュ」制度の構築（案）を踏まえて～

①システム継続のためのキーパーソン

- 人材バンクに類するものは学校独自でもっていたり、生涯学習センターや民間企業ももっていたりする。様々なバンクを紐付けることができればという期待もあったが、紐付けられている取組は今のところ見当たらない。その繋ぐ役目を生涯学習センター等が担えるのではないか。
- 人材バンクは個人が登録し、個人が活動するイメージをもちやすい。かつて、D×P（定時制・通信制の教育団体）という団体とたまたま大阪で繋がりができて事業を実施することになったことがある。彼らのやり方は、テーマに基づいてその地元で人を集めて選抜をして来てくれるというやり方。繋がった人がさらに集団の繋がりを持っていると、メニューが広がる。複数の協力団体との繋がりがもてると良いのではないか。
- 管理職経験者や学生以外の場合には、人件費の確保が大きな課題になるので、事業継続のための資金が必要になる。
- 実践事例の中でも、その社長がキーパーソンで、相談をするとさらに人が広がってきた。信頼できる方で、趣旨に賛同して協力してもらえると、実施事業に予算がかからない。
- コンシェルジュ役になるキーパーソンがいるかどうか、また、その人が信頼できる人かどうかが、大きな鍵となる。見つけてくれた人が思い通りにならないこともある。
- 地域コーディネーターのような方が必要で、趣旨を把握した仲介役として機能し、誰の責任において行うかはクリアすべき課題だと考える。
- 適確に学校のニーズを把握できなければ、うまく機能しない。学校という組織で生徒をどう育てるかという統一見解がもてているかどうか、それを外部にも伝えていけるかが重要。
- コンシェルジュは学校退職者と学生がチームになると機動力が良くなるのではないか。
- 既に各学校にある繋がりを、コンシェルジュ役にフィードバックしてもらえると活用できそう。

②学校内での理解・働きかけ

- 学校の中では自分しか動いてなかったが、外部人材が一緒になって考え、同じレベルで支えてくれていたので、それが負担という思いはなかった。
- 継続するためには、外部と一緒に行っている取組を理解して、学校内部にコントロールしてく

れる人が必要。学校の中で広めるのは負担が大きい。

- 学校では分掌や教科に位置付かないと継続しにくい。
- 科目群での意思統一は実現可能かと思うが、それ以上の範囲では難しい印象がある。
- 複数校での取組は、教育という意味でも非常に有効だが、単位認定となると、学校によって条件が異なる。評価は学校によって異なることは差し支えないと思う。
- 現場の状況を考えると、普段の授業を変える意識がなければ、システムも活用されない。
- 学校の中にコンシェルジュ役がいると機能しそう。また、各学校のコンシェルジュが集まる場があり、複数の学校の情報を共有して重なりがあればそれを実現するような仕組みがよいかもしれない。

③その他

- これまで学校に協力してくれた外部人材の話では、特別なものでなく、協力したことで見える成果・報告があるだけでも、モチベーションに繋がると言ってくれる。
- ①コンシェルジュ役のフットワークが軽い（学校の中にも、地域の中にも出向いていける）、②各学校にコンシェルジュ役（より身近に機能できるではないか）、③学校の良いアイディアは校長が認める（校内での動きやすさを生み出せる）、これが揃うと良いシステムになるのではないか。

（４）平成 28 年度の研究の継続と事業申請等について

- 次年度も「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の中で申請予定。次年度も、引き続き委員の先生には協力していただきたい。
- 平成 28 年８月１日の「教師力向上フォーラム」で札幌の事例について発表予定あり。

５．その他（連絡）

- 先進事例視察の希望があれば、２月中に事務局まで連絡を。

６．閉会

Ⅱ．外部人材の活用状況報告

１．各校における活用状況集約

（１）調査の目的

現状の把握：どのような場面でどのような人材が活用されているのか、実態を把握する。

（２）調査時期

平成 27 年９月～平成 28 年２月

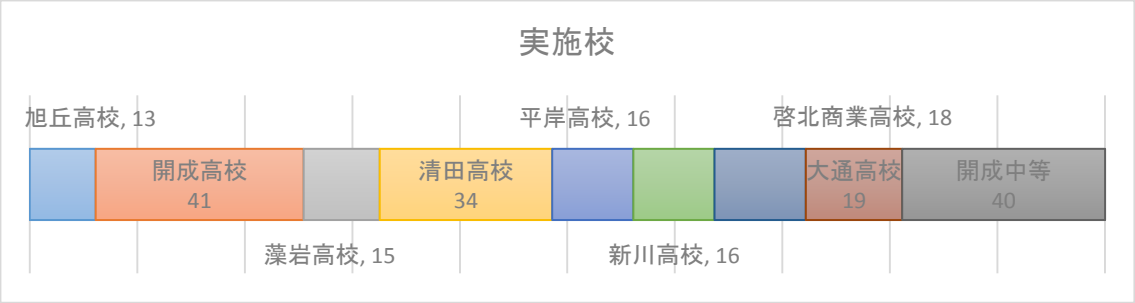
（３）調査概要

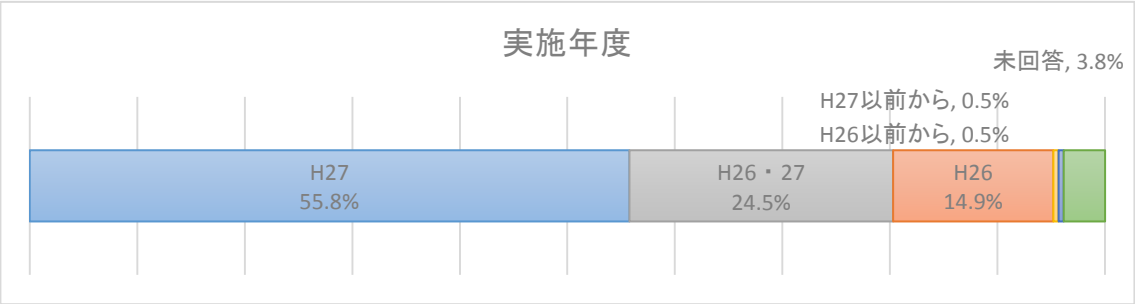
調査対象：札幌市立高等学校・中等教育学校全校

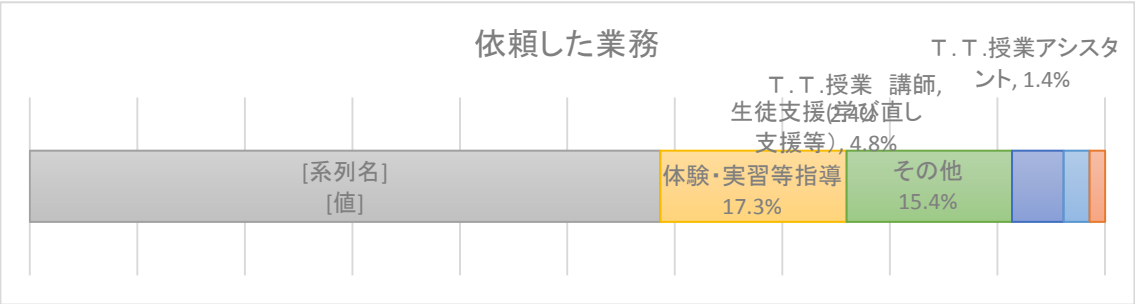
調査方法：アンケート配布調査（記名・任意）

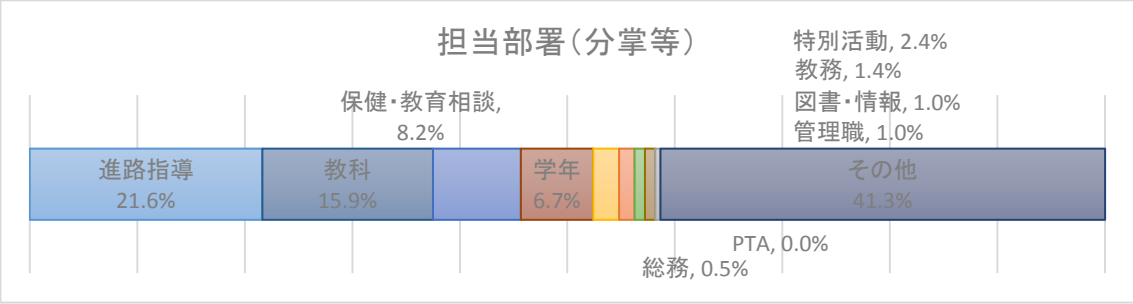
有効回答数：全校より合計 208 件の回答があった

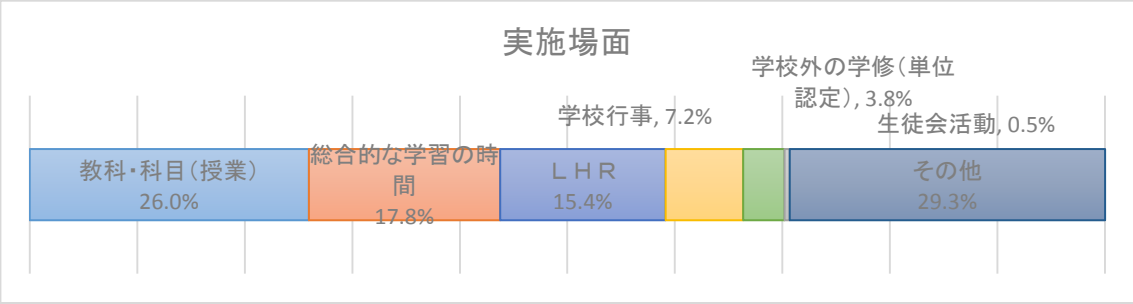
（４）調査結果

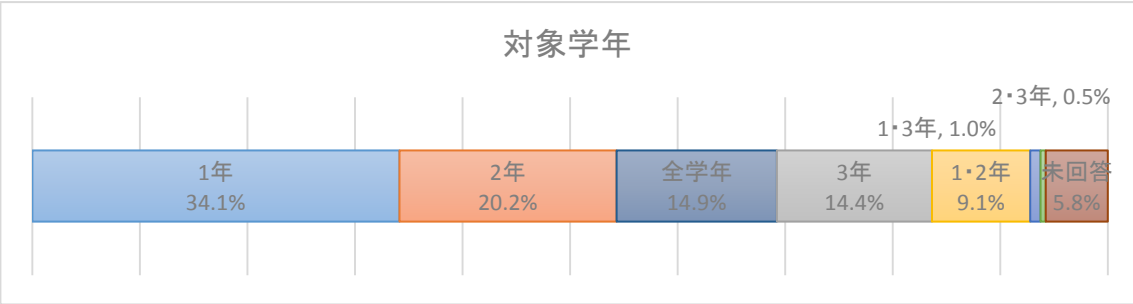


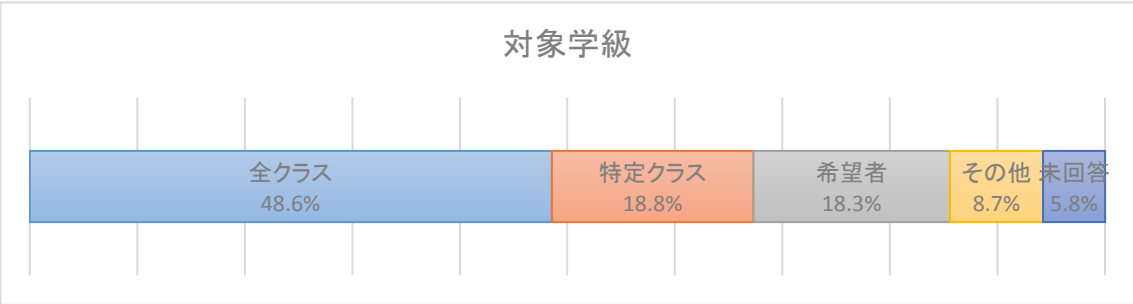


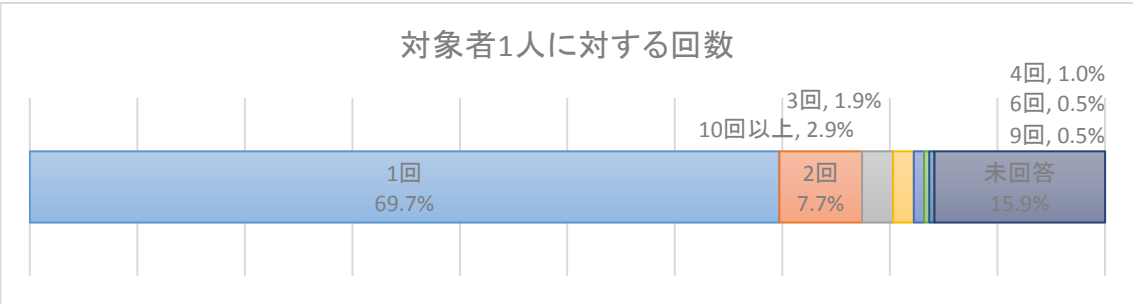


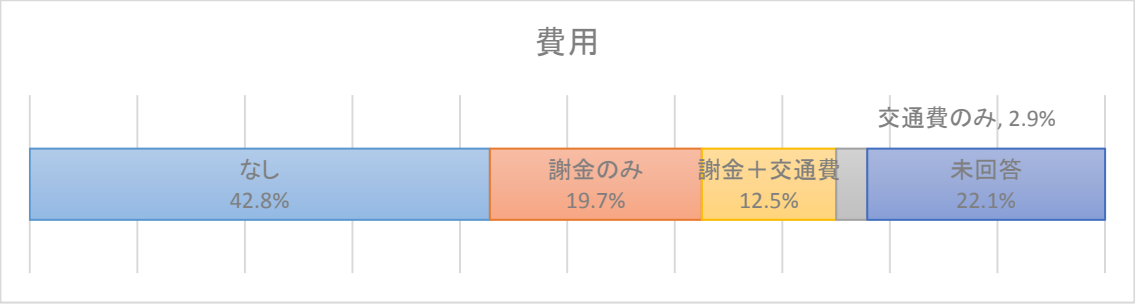

担当部署（分掌等）
進路指導 21.6%
教科 15.9%
保健・教育相談, 8.2%
学年 6.7%
総務, 0.5%
PTA, 0.0%
その他 41.3%
管理職, 1.0%
図書・情報, 1.0%
教務, 1.4%
特別活動, 2.4%

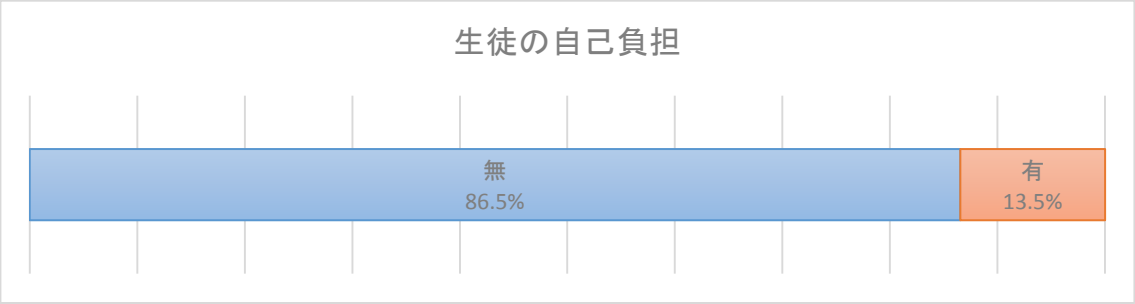

実施場面
教科・科目（授業） 26.0%
総合的な学習の時間 17.8%
ＬＨＲ 15.4%
学校行事, 7.2%
学校外の学修（単位認定）, 3.8%
生徒会活動, 0.5%
その他 29.3%


対象学年
1年 34.1%
2年 20.2%
全学年 14.9%
3年 14.4%
1・2年 9.1%
1・3年, 1.0%
2・3年, 0.5%
未回答 5.8%


対象学級
全クラス 48.6%
特定クラス 18.8%
希望者 18.3%
その他 8.7%
未回答 5.8%


対象者1人に対する回数
1回 69.7%
2回 7.7%
3回, 1.9%
10回以上, 2.9%
4回, 1.0%
6回, 0.5%
9回, 0.5%
未回答 15.9%





２．各校における活用状況分析

市立高校における外部人材の活用状況について、講演会という形式が多く、内容は多岐にわたっていることから、生徒が社会の様々な事象に関心を持つためのきっかけ提供を主な目的としていることが調査結果から読み取れる。外部人材は、学校にとって非日常的な存在という意味でも、専門的な知識を持っているという点でも、生徒の関心を呼び起こすのに教員より適していると言えるだろう。

一方で、関心を持った生徒に対して日常的かつ継続的に関わりながらその関心を深めていくことは、現状の制度では難しい。外部人材が継続的に活動するために必要な費用の問題のほか、多様な外部人材の調整に係る教員の負担も無視できない。さらには、生徒や保護者の安心安全のために、教員免許や採用試験といったスクリーニングに代わる外部人材の評価制度も必要となる。学校単位ではなく市立高校全体でこういった課題に取り組み、教員と外部人材が協働で生徒を伸ばせるような教育体制を期待したい。

◎具体的な実践事例における内容及び生徒への教育効果等

【担当部署（分掌等）：進路指導】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
家庭看護医療についての講演（複数回答）	生徒の進路選択への情報提供	新川
将来、北海道で働くことを想定した、北海道経済の現状に関する講演	金融の専門家による講演を通して、北海道経済について理解を深める	清田
外交官による講演会。国際社会とのかかわり、国際社会で生きることを想定して。	国際社会で位生きていくことの大切さを学ぶ	清田
全国の大学より様々な専門の講師を依頼し、25 程度の出前講座を実施。（複数回答）	大学の学問を知り、進路意識を高め、学びへの動機づけをはかる	清田
大学教授の講演、14 講座に分かれての大学等の教員による出張講義	進路選択の一助として、大学・短大等の上級学校の情報提供をし、自分の進路に対する興味・関心を喚起する	啓北商業
大学の講義の体験	大学で学ぶということ、学部ごとの学びの特徴を理解する	藻岩
出前講義（複数回答）	希望分野の大学での授業の一端を経験することにより進路意識を高める	開成
道内外大学講師による模擬授業	大学の講義内容を学習することで、自己の進路を探究する。	旭丘
3 年生を対象に、各大学より講師を招き大学入試に関する説明を受ける（複数回答）	大学入試情報の収集による、進路意識の高揚	清田
大学選択に関する新たな視点を講演	将来を見通した進路選択の理解の機会	藻岩
大学に関しての詳細を知る	大学進学について深く考え、進路意識を高める。	旭丘
文系、理系、看護系、公務員など進路希望に応じ別れ担当の講師の方から進路情報の提供を受ける（複数回答）	具体的進路目標達成のための手立ての理解	藻岩
受験期の学習法、心構え	受験指導の専門家からの話を聴くことにより、進路意識を高める。	開成
就職予定者対象の学校設定科目および外部専門スタッフによる就職アドバイス	授業中のTT：受講生徒に個人相談レベルで具体的実践的な就職情報の提供、経験不足教員の教科書 随時相談：就職になったがジョブトレは受講していない生徒のフォローアップ	大通
就労訓練	保護者と本人への個別ガイダンス・カウンセリング、状態に合わせた就労訓練と一般就労の方向へ向けたサポート	大通
働くことの意義について	何のために学び、何のために働くのかを考える。	平岸
面接の心得について	企業が求める人材、面接心得について考える。	平岸
小論文の書き方指導	小論文を書く意義・心構えを確認する。	平岸
進路講演会	生徒の進路選択への情報提供	新川
卒業生の体験を聞く講話	進路意識を高める	啓北商業

【担当部署（分掌等）：教務】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
主権と選挙について	主権の行使・ルールについて学ぶ。	平岸
選挙について	主権の行使・ルールについて学ぶ。	平岸
外務省の役割と業務等についての講演	外務省の役割と業務を知る。国家公務員Ⅲ種試験について学ぶ。	啓北商業

【担当部署（分掌等）：総務】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
冬季における地震災害時の避難行動に関する講演会	冬季における地震災害時の避難行動について理解する	藻岩

【担当部署（分掌等）：特別活動】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
スマートフォン利用に関する注意喚起	スマートフォン利用上の注意点等の認識	旭丘
南極観測探検の体験談	貴重な体験談を通して視野を広げる	清田
交通安全啓蒙の講演	交通安全意識の醸成	啓北商業
SNS の知識理解を深める講演	SNS に対しての知識や理解を深める	啓北商業
学校祭に際して食中毒防止の安全意識のための講演	学校祭に際して飲食を担当するにあたっての安全意識の高揚	啓北商業

【担当部署（分掌等）：保健・教育相談】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
お互いの違いを認め合ったり、発想の仕方を変えることで元気になる方法を学ぶ授業	各生活場面における対処法（気持ちのコントロールを含む）の習得	大通
AED を使用した救命救急法講習	救命法技術の習得	旭丘
普通救命講習（複数回答）	不慮の事故の対応できる救命行為の基礎知識・技能の習得	清田
歯科検診でチェックを受けた生徒に歯磨き実習などを実施する。（複数回答）	歯周病予防、生涯にわたる健康な口内環境保持	清田
性感染症、医療現場の実態等	専門家の立場から姓に関する講演をしてもらうことで、授業で学んだ知識を更に深める。	旭丘
青少年の性にかかわる現状、性教育に関する意識を高める講演（複数回答）	性に関する正しい知識を持ち、望ましい人間関係の構築につなげる	清田
薬物被害について（複数回答）	青少年の薬物乱用にかかわる現状を知り、その恐ろしさを認識し、薬物乱用防止に対する意識を高める。	清田
薬物乱用防止等に関する講演	専門家の立場から薬物の危険性について講演してもらうことで、薬物に関する認識を深める。	旭丘
進路スペース常駐のかたちで実施するドロップアウト対策	家庭その他多様な要因でドロップアウトが危惧される生徒に対する、早期からのケアとサポート。実際に退学または卒後無業者となってからも支援継続可能なつながりの構築	大通
地域福祉の実践を学ぶ	地域子育て支援拠点の活動を知る。話の聞き方・広げ方等を学ぶ	啓北商業
医療現場でのサポート	社会の中で心の問題を抱えた人の社会復帰までの仕事や支援について知る	啓北商業
”生きづらさ”を支援する仕事	福祉現場における支援を知る	啓北商業
人間関係トラブルの仲裁；ピアメディエーション体験	人間関係のトラブル解決のスキルを学ぶ	啓北商業

【担当部署（分掌等）：図書・情報】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
オンライン学習システム「受験サプリ」の活用方法	さまざまな学習システムを自分の学習に生かす	平岸
ラジオ生放送における生徒サポート　および指導	生徒が学校広報を担うことにおいて、本物のラジオ局で活動し、実社会での意識を実感させる。	大通

【担当部署（分掌等）：教科】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
英語の授業に関する講義	英語をはじめとした学習方法の習得	旭丘
英語によるポスター発表の評価者	英語による発表や質疑応答により、生きたコミュニケーションができる。	開成
（私らしい住まい）の設計	専門家（1級建築士）による講義と実習	旭丘
国語の授業における講演	留学経験から「話す」「聞く」といったことの大切さを学ぶ	旭丘
総合的な学習の時間での講演	卒業生の体験談を聞くことで総合学習の今後の指針をたてる	旭丘
RS/GJS/GPS 技術の応用	大学での先端科学技術にふれ科学への興味・関心を高める。	開成
有珠山周辺での天体観測	天体観測の専門的知識を得る。	開成
有珠山周辺でのフールドワーク	火山に関する専門的なアドバイスにより、フィールドワークの充実を図る。	開成
結晶は生きている	大学での先端科学技術にふれ科学への興味・関心を高める。	開成
最新宇宙論	大学での先端科学技術にふれ科学への興味・関心を高める。	開成
生物現地観察実習（複数回答）	専門的知識を生かした、フィールドワーク	開成
ゼオライトの分子模型を作る	大学での先端科学技術にふれ科学への興味・関心を高める。	開成
走査型プローブ顕微鏡による原子の観察	大学での先端科学技術にふれ科学への興味・関心を高める。	開成
電子顕微鏡実習	大学での先端科学技術にふれ科学への興味・関心を高める。	開成
エコプロジェクトについて見学・学習	エコシステムの先進的な取組について学習することができる。	開成中等
ダンス	専門性の高い競技者による授業となり、興味・関心を高めることができる。	開成中等
プレゼンテーションの重要性に関する学習	資料作成から発表スキルまで、プレゼンテーションを総合的に理解することができる。	開成中等
陸上競技	専門性の高い競技者による授業となり、興味・関心を高めることができる。	開成中等
遺伝子についての学習と実習	遺伝子と病気の関係について学習することができる。	開成中等
海洋資源の有効活用についての学習	海洋資源の内、廃棄物の有効利用を学習することができる。	開成中等
光の波動性と光変色反応の学習と実習	光と化学反応、光の波動性を学習することができる。	開成中等
太陽光発電、及び火力発電についての学習・見学	太陽光発電、火力発電の利点と問題点を理解することができる。	開成中等
北限のブナ林において、原生林の植生についての見学・学習	原生林と二次林の植生の違いについて理解することができる。	開成中等
洋上風車「風海鳥」について学習・見学	風力発電の利点と問題点を理解することができる。	開成中等

働く女性のためのキャリア支援事業の一環としての講演	働くということをゲストの体験を通して学ぶ	清田
「高校生ビジネスプラングランプリ」の特別講演	応募するプランについての注意点や考え方を理解するため	啓北商業
授業内容に関する講演	授業内容（札幌軟石の利用方法）について理解するため	啓北商業
題材に関する説明・講演	商品開発の具体的方向性を理解するため	啓北商業
開拓使麦酒醸造所の歴史等	開拓使当時の貴重な資料を提供していただき、生徒の学習意欲が高まった。	平岸
プロジェクションマッピングのソフトウェアについて	プロジェクションマッピングの使用方法についてより専門的な指導を受けることができた。	平岸
北海道博物館について	北海道の自然歴史文化について興味関心が深まった。	平岸
在札幌米国領事による出前授業	異文化理解・国際交流の重要性	啓北商業

【担当部署（分掌等）：学年】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
公職選挙法や選挙の仕組みについて理解を深める。話し合いや討論の仕方を学ぶ	主権者としての行動の仕方、在り方を深く学ぶ機会とする	藻岩
選挙や投票参加の意義等についての講演会、模擬投票	主権者意識の涵養と投票行動の意義の理解	藻岩
総合的な学習の時間での講演（複数回答）	進路実現に向けた意識向上	旭丘
進学講演会	2 年生として、進路実現に向けて内をしたらよいかをかんげる機会の提供	藻岩
進路講演会	生徒の進路選択への情報提供	新川
進路指導の一環として進路行事のかたちで実施する	その業種の特徴、働き方、ライフデザインなどの具体的イメージを生徒に持たせる	大通
擬似的労働体験	次年度の就労体験に先立ち、役目を果たすことでの達成感を得させ、社会への認識を開かせる。	大通
労働体験	働くことの実相を垣間見せ、将来への現実的選択を意識させる。	大通
労働体験（インターンシップの一環）	オータムフェストの趣旨であるホスピタリティーを、実際の業務とすり合わせて折り合いをつける経験	大通
社会人講話を座談のかたちで行う	座談レベルの近距離でじっくりと講師の半生をきかせ、生徒自身の中に人生設計構築への意識を持たせる。	大通
課題について多面的多角的に考えることの意義を学ぶ	ジャーナリストとして第一線で活躍した経験と研究者としての実績を活かした講話を聴き物事の見方考え方の基礎を養う	清田
国際理解に関するシンポジューム	異文化理解、国際的視野の涵養の機会となる	藻岩
手帳を利用した学習計画の立て方	学習計画を立て振り返りができるようになること	平岸

【担当部署（分掌等）：管理職】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
AED の使用方法を含む心肺蘇生法の実習	心肺蘇生法の基本的事項の理解	藻岩
研究室において講義、実験、実習	高等教育の研究活動の場での特別な体験であり、環境教育としての意義のみならずいてのみならずキャリア教育としての意義も大きい。	藻岩

【担当部署（分掌等）：その他】

具体的な内容	外部人材の活用により期待すること （生徒への教育効果など）	高校名
5か国国際交流員との交流	各グループの研究テーマに沿って、国際交流員としての視点からの話を聞く。	開成
英語による科学に関する講義（複数回答）	英語力の向上及び科学英語の基礎を学ぶ	開成
英語を使用したドイツの環境に対する取組	ドイツでの取組を知ることにより、札幌と比較し、研究を深めることができる。	開成
市内の ALT を 20 名ほど集め、テーマにそった対話を行う（複数回答）	英語によるコミュニケーション能力の向上、異文化への理解の深まり	清田
海外研修事前研修	各グループの研究テーマに沿って、留学生としての視点からの話を聞く。	開成
現地での研修紹介やベトナム語の練習	研修地の理解と学習の動機づけ、国際的素養の向上	開成中等
ベトナム研修コーディネーター	現地企業・交流校・ODA 等との連絡調整	開成
ベトナム高校生の研修と交流	専門知識の獲得と今後の協力	開成中等
外資系勤務の実態と求められる人材	国際的素養の伸長	開成中等
韓国、中国、ロシア、オーストラリア、アメリカの各国領事館を G コース生徒が訪問し、課題を発見し解決法を学ぶ。（複数回答）	異文化に対するステレオタイプの認識の危険性に気づく。	清田
グローバルコース 3 年間で学習する国際理解の動機づけとする。（複数回答）	海外の諸事情を直接聞き、国際理解を深める	清田
国際交流員の母国プレゼンや札幌のまちづくりを生徒と展望（複数回答）	探究学習テーマの明確化　コミュニケーション能力の向上	開成中等
国際コミュニケーション	国際的な仕事について学び、コミュニケーション能力を高める。	開成
国際支援の現場報告（複数回答）	国際支援の現場報告を聞き国際的な視野を持って物事を考える基礎を身に付ける	清田
国際ボランティアの現状について	国際的素養の伸長	開成中等
青年海外協力隊の活動について	実際の経験を直接伝えていただき、国際貢献の在り方について考えさせる。	開成
富士メガネと社会（国際）貢献	・国際貢献への意識　・専門性の獲得　・留学への関心	開成
札幌市経済局からの要請　貿易関連の海外での起業について	国際的素養の伸長	開成中等
大学留学生ボランティアとの交流やイベントの手伝い	問題解決能力の向上と現状把握	開成中等
北大生との講義および交流（複数回答）	国際的素養の伸長	開成中等
山形県の精神科医、桑山紀彦さんが自ら世界各地の途上国・被災地支援に行ったときに出会った子どもたちや人々の映像を、語りと自作の音楽で綴って紹介する感動のステージ（複数回答）	生徒が知らない世界の出来事を、身近な暮らしに関連付け、考える。	清田
第2回高校生カンボジアスタディツアーの報告会とユネスコ寺子屋プロジェクトについて	ユネスコの活動について理解を深める。	平岸
世界遺産についての学習	ユネスコの活動について理解を深める。	平岸
ESD についての取り組みについて	ユネスコの活動について理解を深める。	平岸
「知っていますか？自転車の事故」と題した講演（複数回答）	交通法規、交通安全に対する意識を高める。自転車のマナーとルールを知る。交通事故に関する危険と責任を認識する。	清田
講師を招いた交通安全指導	自転車事故防止等に関する交通安全意識の啓発	旭丘
交通安全指導	交通事故の実際	平岸

自転車乗車マナーなどの指導講演	自転車乗車ルール・マナーの理解、再認識	藻岩
携帯電話、スマホ、インターネットトラブル防止に関する講演（複数回答）	ネットトラブルの防止、対人関係や生活環境の改善	清田
モバイルツール利用の危険性についての講演	モバイル機器利用のリスクの理解	藻岩
正しい制服の着こなし	正しい制服の着こなし	平岸
イベント企画準備自体での参加	まちづくり総合イベント「だいどんでん」内の「小学生まちなか職業体験」の、生徒による企画運営実行の補佐支援	大通
記事の読み方、リサーチの方法の講義	専門知識の獲得と今後の協力	開成中等
共感を生み出すプレゼンテーション	プレゼンテーションの専門家の極意を学ぶ	開成
デザイン土木に関するプレゼンテーション	プレゼンテーションにおけるデザインの重要性について学ぶ	開成
グッドデザイン賞、ソフトウェアについて	地元企業の活動について知ることにより将来の進路選択に参考になる	平岸
高校生による地産地消を学び、プロデュースするイベント	食をキーワードにした地元文化の学習、開発によるアクティブラーニング、諸規制をクリアする企画案にブラッシュアップしていく学び、当日のサービス体制の学び	大通
校内での養蜂～商品開発～販売まで経験させる自然科学産業経済教育	それぞれ外部人材の専門とする分野の知識。発想を学ばせることで、ハチミツをキーワードに社会を知る手助け	大通
最先端のアルゴリズム技術の紹介	情報科学の重要性や面白さについて学ぶ	開成
札幌市が展望するビジョンの紹介	専門知識の獲得と今後の協力	開成中等
札幌市中央図書館の取組	札幌市の図書館に関する理解を深め、メディアプロジェクトに生かす。	開成
札幌市まちづくり局の取組	札幌市まちづくり戦略ビジョンを学び、各グループの提言内容の参考にする。	開成
札幌で建てられているエコ住宅について	ドイツ研修に向けて課題意識、目的意識を喚起する。	開成
冬の都市市長会の紹介と札幌市の役割	専門知識の獲得と今後の協力	開成中等
定山渓プロジェクト　まちづくりのためのフィールドワーク	問題解決能力の向上と現状把握	開成中等
定山渓プロジェク　体験講座　定山渓を中心に据えた街づくり講義	専門知識の獲得と今後の協力	開成中等
ニセコ巡検　環境モデル都市ニセコ	・国際ビジネスへの挑戦　・地域特性の把握　・地域の取組	開成
全校による水質検査日に講演	水質検査取り組みへの意義や価値を生徒が理解する機会となる	藻岩
台湾の科学教育・科学技術の日本とのつながり	台湾の理解と海外の科学技術についての理解を深める。	開成
ディスカッション、文化交流、パフォーマンス（複数回答）	非言語によるコミュニケーション能力を高める。異文化に対する寛容な態度の涵養。	清田
ディスカッション・ディベート・北大留学生交流（複数回答）	論理的思考力の育成と専門知識の獲得、国際的素養の向上	開成中等
中央図書館視察研修	専門知識の獲得と今後の協力	開成中等
図書館全般に関する講義	専門知識の獲得と今後の協力	開成中等
函館蔦谷書店と未来図書館	本校メディアセンターを「知の空間」としてどうしていくかを考える機会とする。	開成
ピア・サポート活動	孤立しがちなおとなしい生徒たちが、相談できずに抱えている困りごとに寄り添う	大通
ピア・サポート活動（複数回答）	生徒の自己肯定感を高め、いろいろなことに挑戦する意欲を引き出す	大通
学び直し授業のアシスタント	不登校経験などにより、義務教育レベルの学習に対する不安を抱えている生徒へのケア	大通
メディアセンタープロジェクト　視察・講	問題解決能力の向上と専門知識の獲得	開成中等

義・利用など視察研修（複数回答）		
メディアセンタープロジェク　体験講座 様々なメディアと将来のメディア展望	専門知識の獲得と今後の協力	開成中等
薬物乱用防止に向けての講演会	薬物乱用の危険性の理解、再認識	藻岩
理系女性として働くこと	理系女性の生き方を学ぶ	開成
職業ガイダンスのフォロー・プログラムとして、専門学校とタイアップし、その学校の卒業生らに業界を紹介してもらう	生徒の自己肯定感を高め、いろいろなことに挑戦する意欲を引き出す	大通
領事館全般の業務についての講義	国際的素養の伸長	開成中等

Ⅲ．試行実践授業等実施報告

１．試行実践報告書

（１）試行実践一覧

No.	学校名	講座名	内容
1	旭丘高校	「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅲ、客観英語演習」について	１年次の語彙指導の授業及び講演、３年次英語の効果的学習法等の講演、「学びとは何か」についての講演。
2	旭丘高校	総合的な学習の時間「ゼミエントリーシート」の記入指導及び進路講話（看護師・海外協力派遣・大学での学び）等について	「ゼミエントリーシート」の記入に関する指導、進路探究講話（看護師・海外協力派遣・大学での学び）、個人課題研究の執筆準備指導。
3	旭丘高校	聞く・話すの授業「トビタテ！留学 JAPAN プログラムを活用した留学体験談」	現代文の授業において、聞く・話すについての授業を実施。 文部科学省の官民協働プログラム「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」を活用し、１年間インドに留学した体験から留学制度や留学で学んだこと大学で学べることなどについての講話。
4	清田高校	グローバルコース講演会 ～国際支援の現場からの報告	国際支援の第一線で活動している方々から、マスコミでは報道されない紛争地の現実や本人の活動内容について学び、グローバルコースが目的とする「地球市民」としての在り方・生き方について考える。
5	清田高校	主権者教育にかかわる講演会	新聞記者としてジャーナリズムの第一線で活動し、研究者として現代中国論も専門分野とされる講師から、具体的な事例を交えた講演を聴き「政治的な教養の基礎」「政治に参加するために必要な力」を育む。 具体的には政治が対象とする社会、経済、国際関係などについて、その課題を多面的・多角的に考え、自分なりの考え方を作っていく力を養うこと、また自分の考えを主張し説得する力を身に付けていくことを、講演を通して学び、主権者教育の基礎とする。
6	新川高校	総合的な学習の時間「ディベート活動」	２学年における「総合的な学習の時間」におけるディベート活動について、活動に係る学年全体に対する講演及び指導。
7	大通高校	学社融合講座 「普段着でできる！気軽に国際交流～ちょっとしたヒントでもっと身近にもっと楽しく!!～」	・第３回目ワールドカフェⅠ（地域の多文化） ・第６回目ワールドカフェⅡ（地域で災害、どうしよう？）
8	大通高校	第 10 回 DORI-TRPG 研究会	アナログゲーム TRPG を用いたコミュニケーショントレーニング
9	開成高校	CCⅢ	外国人特別非常勤講師授業（ディクセット委員）
10	開成中等教育学校	食育プログラム	高校生アニマドーレプロジェクト （黒田委員による実践）
11	啓北商業高校	未来商学科 地元南区のヒト・モノに教えてもらおう	「札幌軟石」を利用した商品開発の取り組み （添田委員による授業）
12	大通高校	「たまりんぱ」との連携	大学生によるピア・サポート活動を取り入れた居場所活動（蒲生委員による実践）

（２）試行実践報告書

１）「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅲ、客観英語演習」について（旭丘高校）

授業担当教諭：庄末　剛（英語）・長沼　敦子（英語）

協力者または団体	灘中学校・高等学校　教諭　木村　達哉　氏
実施内容	１年次の語彙指導の授業及び講演、3 年次英語の効果的学習法等の講演、「学びとは何か」についての講演。
実施学年等	１～３年次の希望者　（330 名）
実施場面	英語の教科授業

【 外部専門人材活用に至る経緯及び目的 】

本校では１年次と３年次にて語彙指導の教材として、木村氏の著書である「ユメタン」を使用している。木村氏の来札の機会に合わせ、本校への来校依頼を申し出たところ、快諾いただき来校の運びとなった。英語科内で審議を経て、少しでも多くの生徒に機会を与えることができるよう、時間割を工夫するなどして、可能な限り、合同授業の実施を計画。さらに昼休みを利用して全年次の有志生徒へ機会を広げるために告知を行った。

目的は、本校生徒に英語学習のみならず、学習全般のやる気を出させるための刺激を与えることである。

【 実施計画の概要と実施の目的 】

＜実施概要＞

・１年次対象コミュ英Ⅰ合同授業（４講座合同）

・３年次対象合同授業（客観英語演習Ｈ・コミュ英Ⅲ２講座合同）

・教員との懇談（会議室にて）、全年次（有志）生徒対象講演会（教室にて）、まとめの懇談

＜目的＞

使用教材の著者に直に会うことで、教材に対してのみならず、学習そのものへの意欲・関心を高める。また、英語学習の範囲にとどまらない内容の講話を聴き、学びに対する姿勢や、生き方に関わる考えを深める。

【 外部人材を活用した授業の具体的な流れ 】

・１年次対象コミュ英Ⅰ合同授業（講堂にて）

４クラスを時間割変更により、椅子持参で講堂に集め、木村達哉先生に合同授業を行ってもらった。内容は講師の先生ご自身の英語学習の経験談をまじえた英語学習法の紹介、CD 音声を使った英単語学習の具体的な方法、そして、英語学習に向けての動機付けと激励の講話。１校時 35 分ほどの時間であったが、生徒達は日本高校のトップレベルの灘中・高等学校の講師の先生のお話に聞き入り、英語学習に関して、具体的な方法だけでなく、学習意欲を高める刺激を大いに受けた。

・３年次対象合同授業（B302 にて）

２講座合同で、３年次生向けの講話を行ってもらった。３年生は受験が迫り、気持ちが落ち着かない状態にあるが、この時期にすべき具体的な勉強方法や受験に向けての心構えについてはもとより、その受験の先に何があるのか、更には生き方について考えることができるような、非常に示唆に富んだお話をして頂いた。多くの生徒が、講師の体験談やユーモアを交えながらのお話に、ぐんぐん引き込まれ、大変真剣に聞いていた。

・教員との懇談（大会議室にて）

40 分ほどの時間を本校教員７名(国語科、地歴科、英語科)が講師の木村達哉先生に質問する形でお話を頂いた。講師の先生ご自身の灘中・高等学校の教員となるまでの経験談、灘中・高等学校での学習指導・受験指導法、本校における難関大学受験者への学習指導、英文法の定着をはかるための方法など、東大現役合格者毎年平均 70 名を超す学校の講師の話を拝聴した。お話の中で最も感銘を受けたのは、講師の先生が行っている福島県と沖縄県の高校生への無料授業のお話であった。復興が遅れ、諸問題などに苦しむ両県で東大合格者を増やし、日本の中央から地元を振興する人材を育成したい、という先生の、日頃我々が考えない視点と熱意に胸を打たれた。

・全年次（有志）生徒対象講演会（B302 にて）

昼休み 80 名ほど収容できる大教室で、有志生徒を集めて、講話の形で行った。３年生向けに受験についての講話と、学年関係なく、将来、人を助けることのできる社会の人材となることの大切さを説いてくださった。受験については、生徒自身が、今何ができて、何ができないかを認識し、できない部分を克服するために具体的に計画を立て必ず実行していくこと、そして、模擬試験の結果の偏差値に一喜一憂することなく目標に向けて努力することをお話頂いた。将来的に人を助けるためには、科目の勉強だけでなく、様々な面で自分を高めていくことの必要性を語って頂いた。

【 生徒の反応・感想など 】

アンケートに見られるように、講師のお話は内容の素晴らしさだけでなく、人を引きつけるユーモアと構成があり、巧みな話術に生徒全員だけでなく傍聴する教員も引きつけられて傾聴した。内容については、１年次生徒は英語学習の基礎基本の大切さ、特に英単語の学習法を理解し、その実践について強い動機付けを得た。さらに、CD を使った音読の効用と英語のスピーキングに向けての土台作りを学んだ。３年次向け、全年次有志向け講話においても、生徒たちは異口同音に「自分が今、何をすべきかが分かり、とてもやる気が出た。」という主旨の感想を述べている。多くの生徒たちが、日頃使っている「ユメタン」を持参し、著者の方から、サインやメッセージを頂くために、長蛇の列を作り、一人一人直接お話しできたことを喜んでいた。

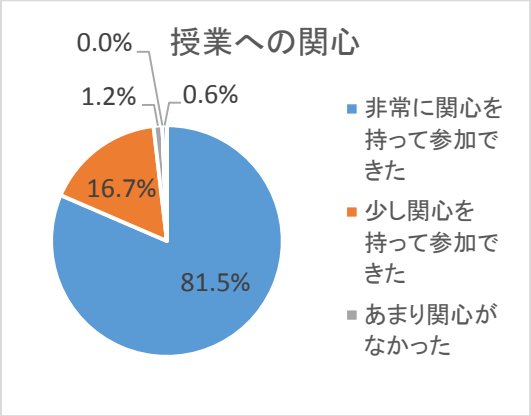
【 本時の実践による効果 】

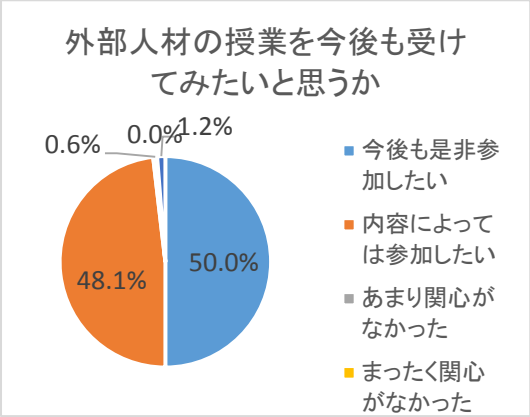
授業実施アンケートからもわかるように、多くの生徒に、学習に対する意欲の向上が見えたことが大きな成果である。また、日々の学習についてもさることながら、学習する目的、今の学びが将来とどう繋がるのか、そして更には自分の生き方を考えるまでに思いを深めた生徒もおり、今後の学校生活においても良い効果が期待できる。

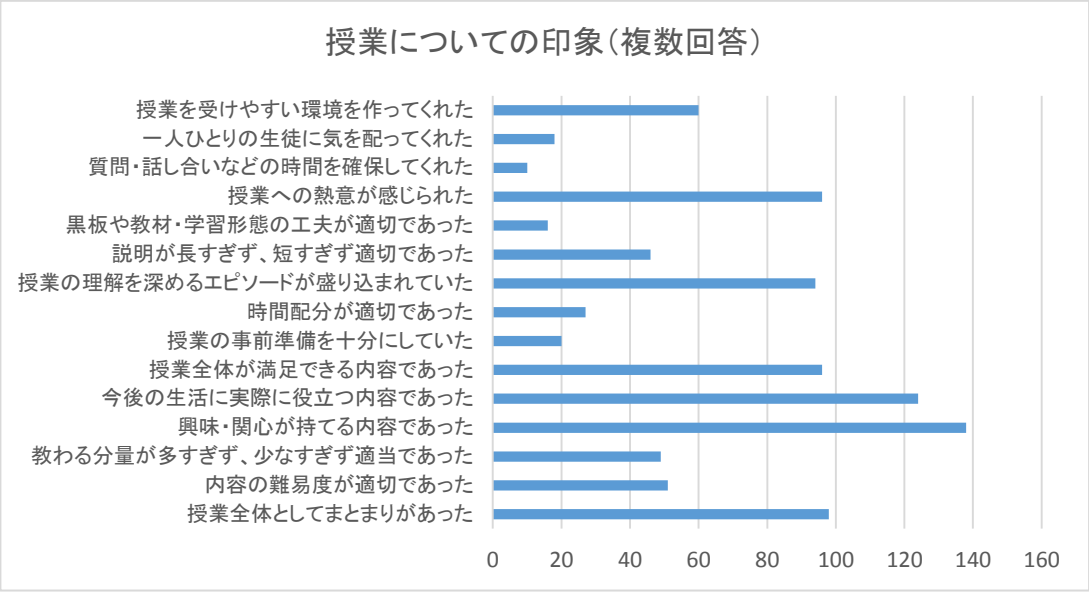
【 まとめ 】

日頃から、授業の中で生徒に考えさせる機会をつくることは大切であるが、外部講師に来校いただくことは、生徒に刺激を与える本当によい機会である。この度、年度途中の計画にも関わらず、このような機会を持つことができ、ご理解・ご協力・ご参集頂いた方々に心から感謝申し上げたい。本来であれば、年度初めに年間計画として位置付けるべきであるが、急な計画ではあっても、このような好機を逃さず生徒に提供できたことは大変良かった。しかし、更に多くの生徒に対し、時間的にもゆとりを持って講話を聴かせることができるよう、今後改めて、このような授業と講話の計画を考えてみたい。

◆　アンケート結果







■　今回受けた授業で、一番記憶に残っていること（自由記述、抜粋）

- もうしっかりと社会の中で生きているという姿。
- 先輩方が強い意志をもって大学生活・実習をおこなっていること。海外のイメージが今回のプレゼンテーションで変わったこと。
- 自分の将来に向けて、とても興味のある分野だったので、学ぶことがたくさんあった。
- 旭丘で行っているゼミの活動は、本当に未来に役立っているということ。
- 大学に進んだ後の先輩たちの海外でのボランティア活動の素晴らしさ。実際のその国の未来のためになっているのはすごいことだと思った。

２）総合的な学習の時間「ゼミエントリーシート」の記入指導及び進路講話（看護師・海外協力派遣・大学での学び）等について（旭丘高校）

授業担当教諭：坂間　卓朗

協力者または団体	札幌市立大学看護学部看護学科３年（旭丘高 52 期卒）伊澤　咲弥　氏
実施内容	「ゼミエントリーシート」の記入に関する指導、進路探究講話（看護師・海外協力派遣・大学での学び）、個人課題研究の執筆準備指導
実施学年等	１年次　（40 名）
実施場面	総合的な学習の時間

【 外部専門人材活用に至る経緯及び目的 】

本校１年次「総合的な学習の時間」で行う「ゼミ課題研究テーマ設定」において、生徒が自身の視野・知見を広げる必要があったため。

「国際貢献」は例年多くの生徒が選択するゼミ課題研究テーマであることから、JICA の派遣事業を通じて国際協力の現場を知り、ODA などの諸制度にも詳しい伊澤氏に講義をお願いした。

加えて、伊澤氏は現在、札幌市立大学看護学部に通う本校卒業生でもあり、ゼミ課題研究の方法や看護師の実際についても生徒に指導していただけると考えた。

【 実施計画の概要と実施の目的 】

本校の総合的な学習の時間 Sunrise Time の中心的取り組みである「ゼミ課題研究テーマ設定」において、生徒が自身の視野・知見を拡張し、充実したテーマ設定が行えることを目的とし、総合的な学習の時間（１時間分）を使用し、講演と質疑応答を行った。

【 外部人材を活用した授業の具体的な流れ 】

① 事前打ち合わせ　　主にメール、電話により当日の講演内容を決定。
② 講師紹介・本時の目的説明（５分程度）　伊澤氏の経歴、自らの視野・知見を広げる目的を説明。
③ 講演（30 分程度）総合的な学習の時間で、パワーポイントスライドを使用して講演。
④ 質疑応答（10 分程度）生徒からの質問・応答。卒業生、現役看護学部生の視点からアドバイス。

【 生徒の反応・感想など 】

国際貢献や看護師に関心が強い生徒だけでなく、他分野に興味・進路希望を持つ生徒たちも伊澤氏の話によく耳を傾け、メモを取るなどしていた。

スライドを使用した分かりやすい説明と十分な情報量もさることながら、卒業生が活躍し、後輩へ熱心に講演する姿に、生徒たちは刺激を受けていたようである。

【 本時の実践による効果 】

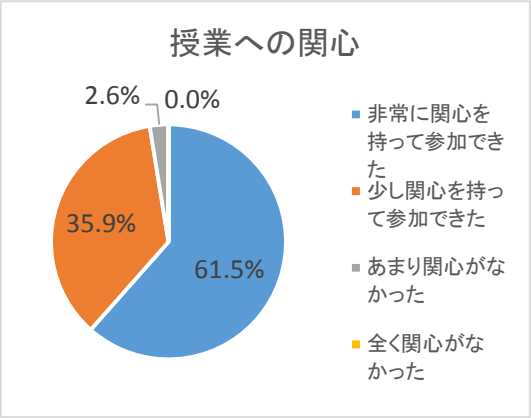
総合的な学習の時間において、今後取り組むゼミ課題研究テーマ設定（エントリーシートの作成）において、その内容の充実が期待される。

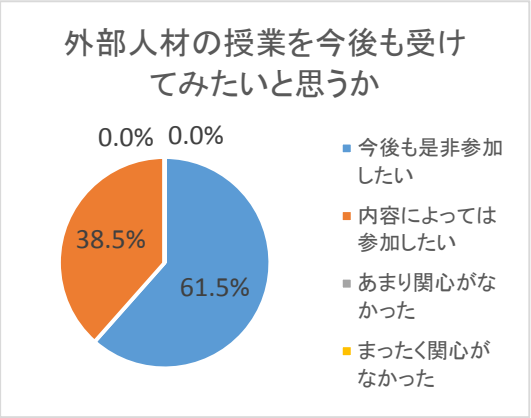
【 まとめ 】

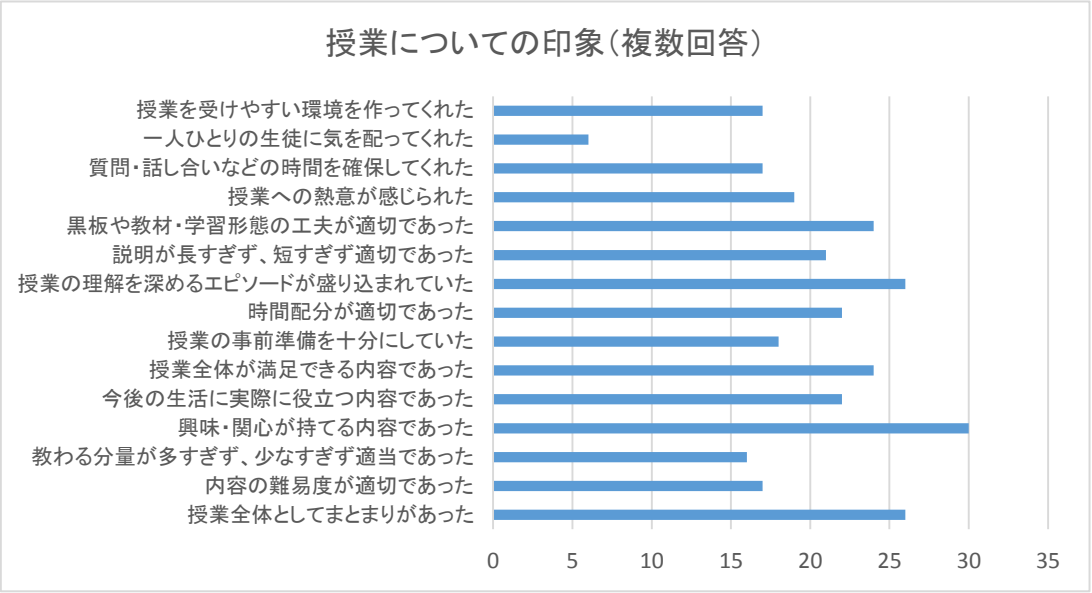
伊澤氏の講演にあった新興国の実情やザンビアでの活動の様子は、その意図や背景も含め、生徒たちにとってだけでなく、私達教員にとっても、初めての情報が多かった。

生徒－教員間で行う日々の基本的な学習活動だけではその獲得が難しい豊富な知識・経験を持つ方をお招きし、生徒たちに教えていただくことは、生徒たちの「学びの意欲」を喚起する上でも有効であることを実感した。

◆　アンケート結果







■　今回受けた授業で、一番記憶に残っていること（自由記述、抜粋）

- 勉強にはバランスが大切なこと。
- 自分は今何ができて何ができないのかを明確にし、自分の決めた期限までに確実に克服するということ。
- 夢を実現するのに必要なこと。
- 自分の力は自分で身につける。
- 英語の勉強方法を詳しく教えてくれたこと。
- キムタツ先生の学生時代のエピソード。
- 全体的にとても聞きやすかったが、中でも先生の軽妙な語り方に興味をかきたてられた。
- 先生が自分の人生について語っていた点。
- 「地元を守りたかったら東京へ行け」ということ。自分の概念を覆すことだった。

３）聞く・話すの授業「トビタテ！留学 JAPAN プログラムを活用した留学体験談」（旭丘高校）

授業担当教諭：成　田　英　行

協力者または団体	北海道大学４年（旭丘高卒）　　久　保　まりな　氏
実施内容	現代文の授業において、聞く・話すについての授業を実施。 文部科学省の官民協働プログラム「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」を活用し、１年間インドに留学した体験から留学制度や留学で学んだこと大学で学べることなどについての講話。
実施学年等	２年次(80 名)
実施場面	現代文の授業

【 外部専門人材活用に至る経緯及び目的 】

現代文の授業において、「読む」だけではなく、「聞く」「話す」についても、学ぶ時間をとりたいと考えていた。また、これからの時代は、世界の人々とかかわって、生活や仕事をしていくことが多くなるため、生徒たちに、日本以外の生活や文化・考え方に触れ、視野を広める機会が必要だとも思っていた。

本校の卒業生である、北海道大学法学部４年生　久保まりな　は、大学内外で様々な活動に積極的に参加しており、「トビタテ！留学 JAPAN」の制度を活用して、インドにも留学してきている。

彼女の体験や意識の変化、視野の広がり等について、話を聞くことは、生徒たちにとって、意義深いものとなると思い、講師を依頼した。

【 実施計画の概要と実施の目的 】

「聞く」「話す」についての、注意点を学ぶとともに、自分の視野を広げることについて考えるきっかけとすることを目的として、１時間、パワーポイント等を使用した講話を聞き、さらに、質疑応答や意見交換を行う。

【 外部人材を活用した授業の具体的な流れ 】

① 事前打ち合わせ（電話により、当日の内容・使用機材等について確認）
② 事前準備（使用機材が正常に作用するかどうか、授業の流れの確認）
③ 久保氏の紹介・本時の目的の説明（５分）
④ 講演（35 分）「トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ」の紹介の動画、インドでの体験のパワーポイントスライド等を使用しての講演。
⑤質疑応答・意見交換（10 分）

【 生徒の反応・感想など 】

スライド等を使用したわかりやすい説明と、熱意ある話しぶりに真剣に聞き入っている生徒が多かった。生徒と年齢の近い先輩の上手な説明に感心し、また、留学についての理解が深まり、とてもよい刺激となった生徒が多かったようである。アンケートの結果も好評であった。

【 本時の実践による効果 】

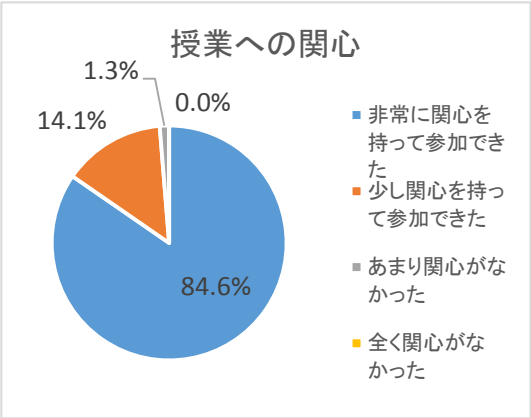
自分が、総合的な学習の時間における個人課題研究のパワーポイントを使った説明を行う際の参考になったようである。

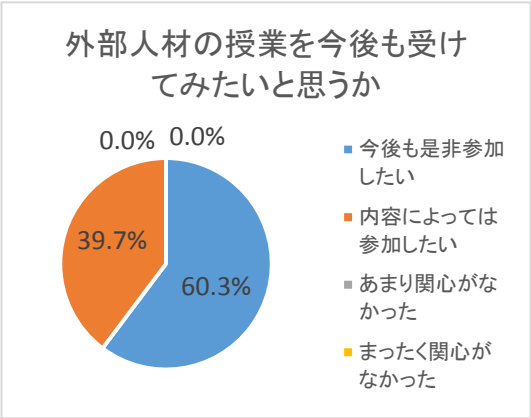
また、留学を選択肢の一つとして、積極的に考えてみようと思うようになった生徒が増えた。

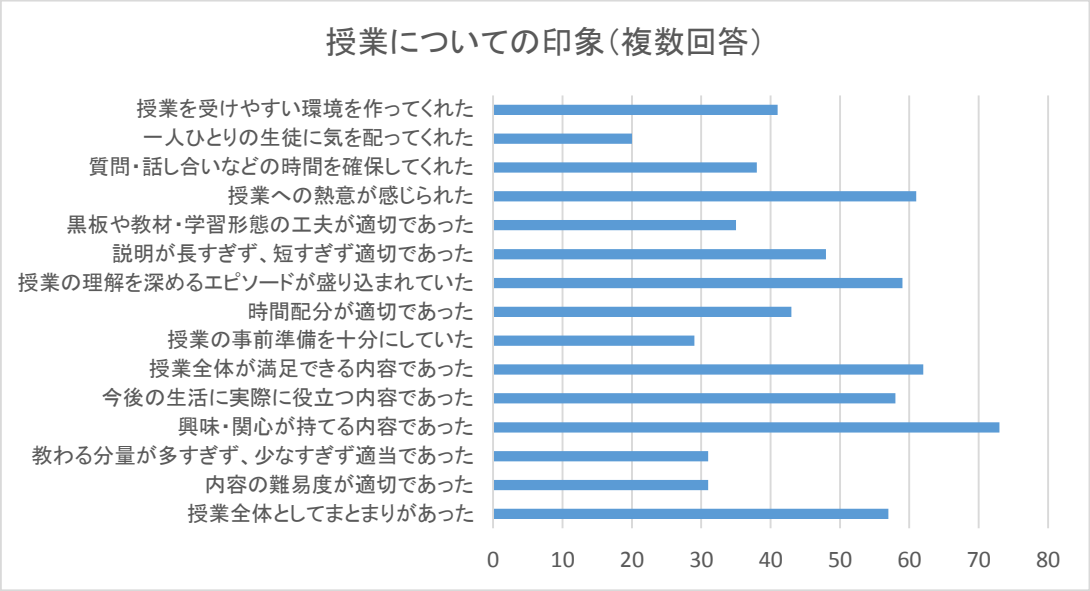
【 まとめ 】

生徒に年齢が近い講師であるだけに、生徒の関心も強く、得たものも大きかったようである。生徒たちの「学びの意欲」や「知的好奇心」を高めることにつながる授業になったと思う。

◆ アンケート結果







■ 今回受けた授業で、一番記憶に残っていること（自由記述、抜粋）

- 留学は大変なことも多いと思うけれど、することによって将来の自分に何か役立つのではと思う。
- 留学というのは特別なものではなく、自分でもやる気があれば申し込めること。
- とても話し方が上手だったこと。引き込むような話し方で、とても集中して聞くことができた。最後に要点もまとめて、おさらいをしてわかりやすかった。
- 「留学に行ったことで一皮むけて、自分が本当に求めているものがわかった。」というところ。私は自分自身のことがよくわかっていないので、とても心に残った。
- 国が支援してくれる留学制度があり、自分の希望を叶えてくれること。
- すごく留学に行きたくなったし、もっと将来に向けて積極的にならなければと思った。行動するのには自分に自信を持つことが必要だと気付いたので、とりあえずは、今与えられている課題等を完璧にこなした上で、色々なことに挑戦するべきだと思った。

４）グローバルコース講演会～国際支援の現場からの報告～（清田高校）

授業担当教諭：長沼　斎（グローバルコース委員会・国際理解）

協力者または団体	イラク支援ボランティア　高遠　菜穂子　氏 元海外青年協力隊（ヨルダン難民キャンプ派遣）　鈴木　雄太　氏
実施内容	国際支援の第一線で活躍している方々から、マスコミでは報道されない紛争地の現実や本人の活動内容について学び、グローバルコースが目的とする「地球市民」としての在り方・生き方について考える。
実施学年等	グローバルコース１～３年全員　（120 名）
実施場面	学校設定科目「国際理解」

【 外部専門人材活用に至る経緯及び目的 】

グローバルな視点で社会に貢献する「地球市民」を育成するグローバルコースでは、コース開設以来「国際理解」の授業で積極的に外部から講師を招いてきた。本校教員では提供できない、新鮮かつ専門的な知識を生徒に提供し、新たなものの見方や考え方に気付く機会を創ることが目的である。

【 実施計画の概要と実施の目的 】

昨年グローバルコース３学年全体が聴講する「グローバルコース講演会」を実施した。好評により今年も引き続き実施することにした。

グローバルコースの国際理解の授業では世界の紛争について学習し、伝統的にイラク戦争を取り上げてきた。IS 以外には日本のマスコミがほとんど取り上げないイラクや難民の現状を、その地域で実際に支援をしている人物から直接話を聴くことによって、生徒の地球市民としての資質を高めることが目的である。

【 外部人材を活用した授業の具体的な流れ 】

昨年に引き続きイラク支援ボランティアの高遠さんには、昨年以降のイラクの現状報告と自身のボランティア活動の報告。

今年お願いした鈴木さんには、自身が海外青年協力隊に参加することになった経緯、そしてヨルダンでの難民キャンプの現状と自身の活動の報告。

それぞれ 45 分ずつ講演して頂いた。全体会終了後、質疑応答の時間が授業時間では確保できなかったため放課後、参加希望者全員と質疑応答の時間を設けた。

【 生徒の反応・感想など 】

反応は非常によく、質疑応答の時間は予定を超過して討議が行われた。

【 本時の実践による効果 】

戦後 70 年が経過し、日本人でも直接戦争を経験した方が少なくなり、生徒が「戦争」を身近に感じ想像することが難しくなってきている。しかし、一方で世界では戦争が減るどころか増えている。どうして戦争が起きるのか、起きないようするにはどうしたらいいのか、起きてしまったら自分は何をすればいいのか、こういったことについて直接紛争地で体験している方に語ってもらう事は非常に示唆に富み、貴重なことである。グローバルコースのスローガンは“Think Globally, Act Locally.”であるが、戦争を無くし世界平和のために自分が何をすべきか、生徒一人一人が考える良い機会となった。

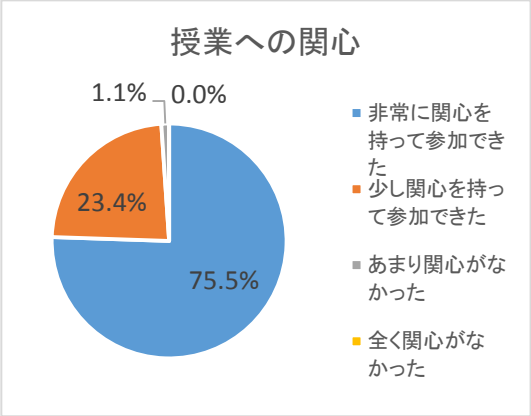
【 まとめ 】

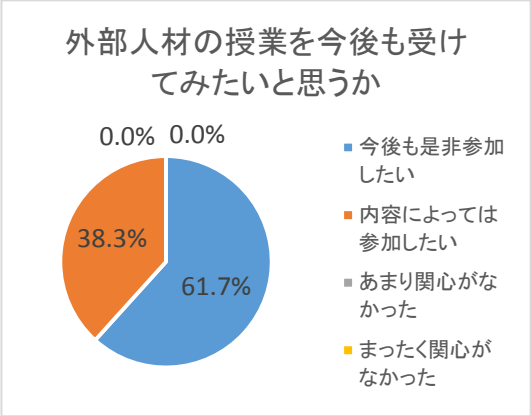
今回は講師２名で 45 分ずつだったが、高遠さんの講演時間が不足し、放課後の質疑応答がその補足を

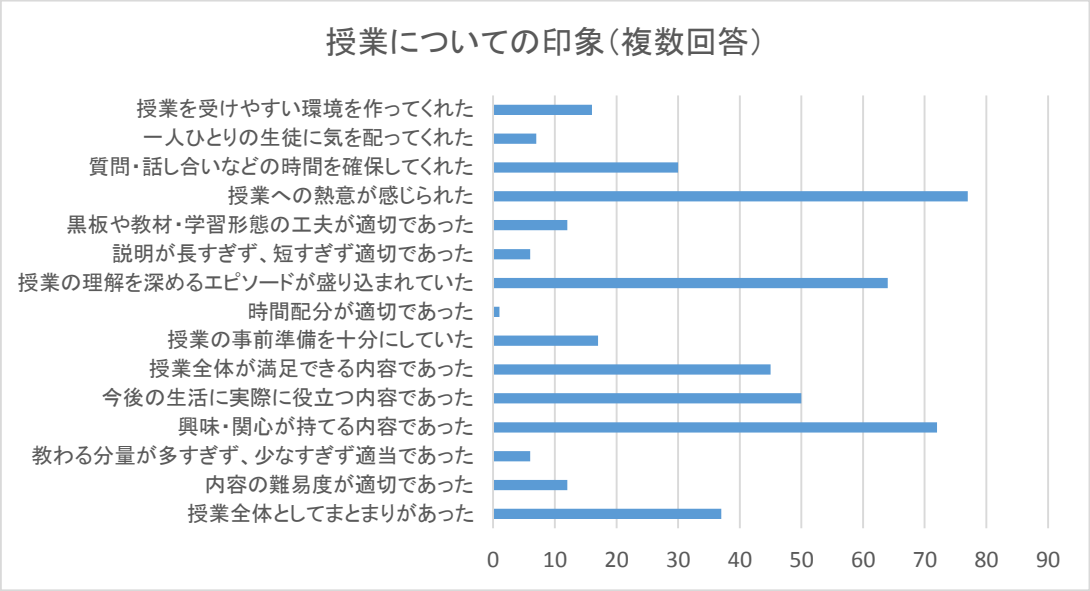
含め、予定よりも１時間以上超過した。講師はやはり１人に絞りこむべきだった。

高遠さんの講演は２年目となり、生徒の関心も高い。グローバルコースでは毎月 11 日にチャリティを行い、収益の一部を高頭さんの活動に寄付してイラク支援を行っている。今後とも定点観測として高遠さんにグローバルコースでの講演を依頼する予定である。

◆ **アンケート結果**







■ **今回受けた授業で、一番記憶に残っていること（自由記述、抜粋）**

- 私にとって信じられないような経験した時の写真を見せてくださったこと。
- 日本がとても平和であること、そして、いろんな国の戦争についてあまり知っていないこと。
- 新聞やニュースを見ても、知られていない事がらが多くあること。
- 戦争、内線、紛争の実際に残酷さ。
- 生々しい表現がいい意味で多くて、すごく今でも鮮明にその話を覚えています。
- 紛争の地域の現状は、自分達が思っていた以上に複雑だったこと。
- 迫力のあるお話に圧倒されたが、イスラム国がなぜできたのかを知ることができて、なぜそういったかたちになってしまったかを知ることができた。
- 講演はとても分かりやすく、心にひびいた。動画とかもあって、今までは遠くに感じたけど身近に感じることができた。

５）主権者教育に係る講演会（清田高校）

担当教諭　　松浦　成行（第１学年主任）・川村　英生（第２学年主任）

協力者または団体	北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 東アジアメディア研究センター　教授　藤　野　彰　氏
実施内容	新聞記者としてジャーナリズムの第一線で活動し、研究者として現代中国論も専門分野とされる講師から、具体的な事例を交えた講演を聴き「政治的な教養の基礎」「政治に参加するために必要な力」を育む。 具体的には、政治が対象とする社会、経済、国際関係などについて、その課題を多面的・多角的に考え、自分なりの考え方を作っていく力を養うことを、講演を通して学び、主権者教育の基礎とする。
実施学年等	第１～２学年全員　（635 名）
実施場面	LHR と「総合的な学習の時間」を組み合わせて実施

【 外部専門人材活用に至る経緯及び目的 】

挙権年齢が満 18 歳以上に引き下げられたことを踏まえて、文部科学省・総務省で作成された『私たちが拓く日本の未来』(『副教材』)を活用するとともに、年度途中ではあるが、授業並びに LHR、「総合的な学習の時間」等を利用しながら、有権者として求められる力を身に付けさせる指導が喫緊の課題としてあった。

『副教材』については、その活用目的や方法等について、生徒本人並びに保護者に対しての説明を添えて配付したが、合わせて「講演会」等を通して「政治的な教養の基礎」「政治に参加するために必要な力」を育むため、１、２年生対象の講演会を企画した。年度途中であり、あらかじめの予算措置等がない状況ではあったが、次年度に先送りすることなく講演会を開催するために、この「外部専門人材活用事業」への申請となった。

【 実施計画の概要と実施の目的 】

年末の 12 月 15 日に、『副教材』を持参のうえで北海道大学大学院の講師研究室を訪問し、下記の目的並びに実施概要についての打合せを行った。その際、下記のポイントを参考にして、具体的な事例等もおりまぜながら高校生にお話しいただきたい旨要請し、快諾いただいた。

目的　講演会を通して「政治的な教養の基礎」「政治に参加するために必要な力」を育む

→「政治的な教養を育む」・・・（副教材より抜粋　ｐ７）

・「政治の仕組みや原理について知ることはもちろんのこと、政治が対象とする社会、経済、国際関係など様々な分野において**日本の現状はどうなっているのか、また課題はなにかといったことについて理解すること**が必要です。」

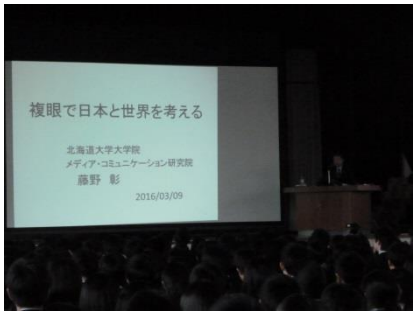
・「政治とは自分で判断することが基本ですので、**課題を多面的・多角的に考え、自分なりの考えを作っていく力**が必要です。」

・「**各人の考えを調整し、合意形成していく力**も政治には重要であり、とりわけ、**根拠をもって自分の考えを主張し説得する力**を身に付けていくことが求められます。」

→「政治に参加するために必要な力」・・・（副教材より抜粋　ｐ．７）

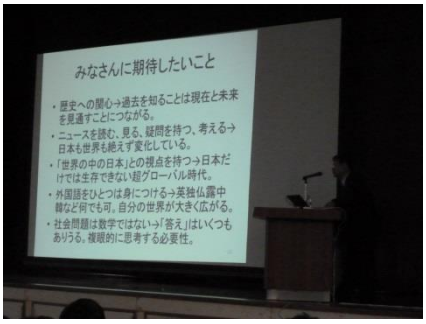
・「政治に参加する」とは様々な機会をとらえた学習を通して知識や技能を身に付け、日常生活のあらゆる決定の場面において主体的に関わり、自分の考えをもってその決定に積極的に関わる機会を持つように努めること。そしてそのような姿勢を身に付け行動に移せること。

【 外部人材を活用した授業の具体的な流れ 】



期日　平成 28 年（2016 年）３月９日（水）
　　６、７校時（14:15～16:05　110 分）LHR+総合
会場　本校　体育館　　**対象**　１、２年生　636 名
時間　設定時間 50 分授業２コマ分(休憩 10 分含)110 分
　　講演　60～70 分　　質疑　10 分程度
　　振返り 10 分程度　各教室内での振返り（アンケート）

演題　**「複眼で日本と世界を考える」**



環境　ステージスクリーンにパワーポイント投影
資料配布　事前(当日の朝)にスライド資料を配布
講演の流れ
・選挙権年齢について、選挙権の意義について
・物事に対して主体的に考えることの大切さ
・「日本の常識」は世界と異なる事例
・食文化や宗教等を事例に挙げながら「異質なもの」を理解することについて
・物事を多面的にとらえることの大切さ
・これからの日本を生きる生徒への期待　※直前の中国出張等の写真などを交えての講演

【 生徒の反応・感想など 】

ジャーリストとして第一線で活躍されていた藤野氏ならではの事例に刺激され、「複眼で」「多面的・多角的に」考えることについて、生徒は興味を示し反応していた。
感想→・一つの社会問題もいろいろな方面から捉えて考えることが大切。
・メディアの情報と実際の情勢のズレを見極める目が必要。
・自分とは違う考えや文化を頭から否定せずに違いを理解していくことが大切。
・しっかりと自分の考えを主張していくことが国際社会では求められている。
・何でもよいので一つ外国語を日常的に話せるようになりたい。など

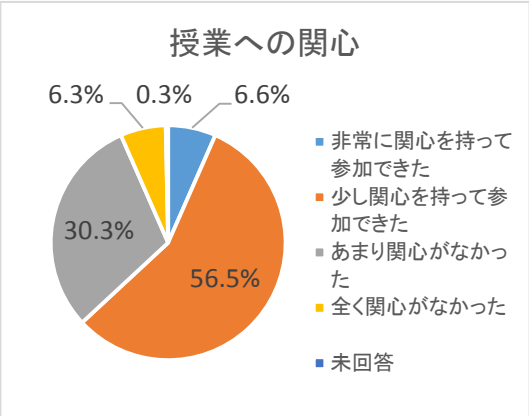
【 本時の実践による効果 】

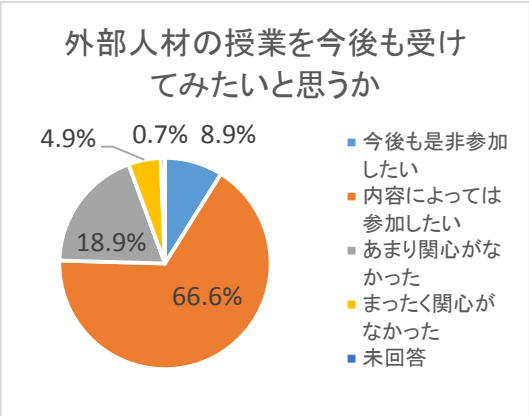
「政治的な教養の基礎」「政治に参加するために必要な力」を育むという目的を達成することができた。１、２年生として、新年度、教科の学習や「総合的な学習の時間」のプログラムにある「ディベート」などに主体的に取り組む意欲を喚起することができた。

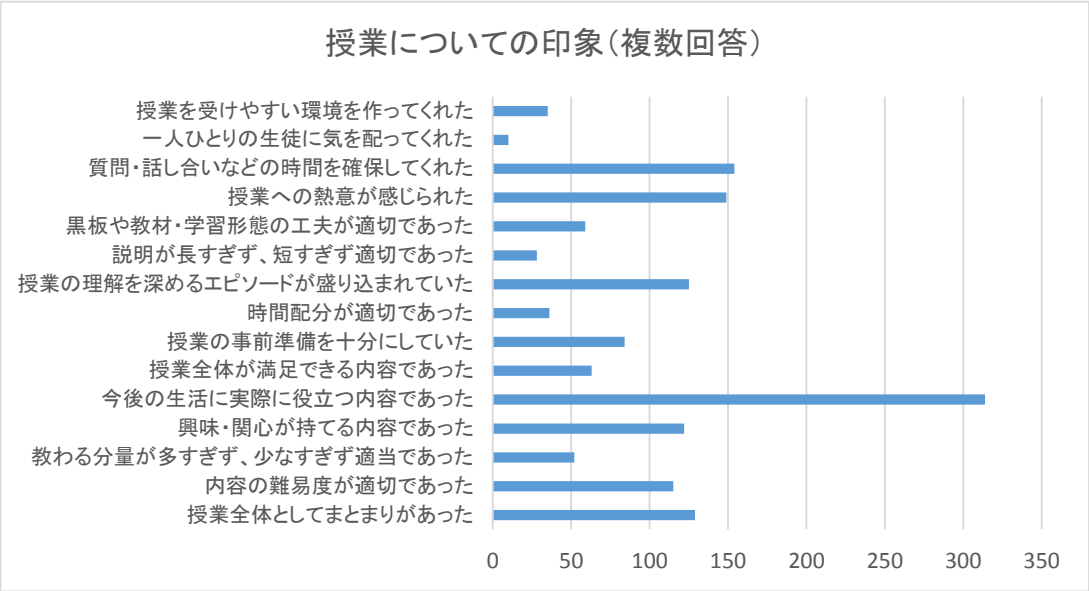
【 まとめ 】

今回の成果を踏まえ、今後も機会を捉え、外部専門人材の活用を図っていきたい。

◆　アンケート結果







■　今回受けた授業で、一番記憶に残っていること（自由記述、抜粋）

- 物事を多面的に捉えるとどんなことにも通じると思うので、意識しようと思う。
- 18 歳の選挙権は、仮免許のようなものだが、大人との対等な 1 票である。
- 「自分には関係ない」ことはないという言葉はとても心に染みました。来年は、18 歳になるので、もう人ごとではないと思った。
- メディアが発信する情報と実際での情報とのズレを国家間の問題を具体例に出して説明してくれたのが、心に残った。
- まずは、日本の政治についてよく知ること。そして、海外からの視点で物事を考えること。
- 日本人は主張することが苦手だということ。国際の場で自分の言いたいことを言わないと間違った解釈をされることもあるため、主張は大事だと分かった。
- 18 歳以上が選挙権年齢の国は、191 分の 176 の国だということにとても驚いた。日本が少数派だということを初めて知った。
- 世界の文化など様々なことを学ぶことが大切だと思う。

６）総合的な学習の時間「ディベート活動」（新川高校）

授業担当教諭：小川　恵子

協力者または団体	北海道科学大学　未来デザイン学部　准教授　佐々木　智之　氏
実施内容	２学年「総合的な学習の時間」におけるディベート活動について、活動に係る講演及び指導
実施学年等	２学年全員　（318 名）
実施場面	総合的な学習の時間

【 外部専門人材活用に至る経緯及び目的 】

36 期は１学年時にも総合的な学習の時間にディベートについての学習を行っているが、取り組みへの関心の持ち方にばらつきがあることが問題だった。なぜディベートを行うのかということを生徒が理解すること、ディベートを行うための準備で実際に生徒が直面する問題の解決により具体的な示唆を与えることを目的として外部専門人材活用を利用した。

【 実施計画の概要と実施の目的 】

北海道科学大学佐々木先生によるディベートについての講演会及び学生によるモデルディベート（2 時間）、立論の準備（１時間）、ディベートの試合（４試合を２時間で実施）合計５時間で実施した。ディベートは賛成と反対の対立ではなくある問題を複数の立場から検証する建設的な活動であるということを学び、具体的なディベートの技術を得ることが目的である。

【 外部人材を活用した授業の具体的な流れ 】

体育館でディベートとは何か、ディベートの学習者はどうなるのか、試合の流れ、試合の聴き方について北海道科学大学佐々木先生に講演していただき、普段からディベートの試合をゼミで行っていて大会に参加した経験を持つ北海道科学大学の学生によるモデルディベートを学年全員で見学した。立論の準備中には４名の学生が８クラスを適宜巡回し、アドバイスを行った。試合の時間には各教室に１名の学生が入り、試合の講評、アドバイスを行った。

【 生徒の反応・感想など 】

大変熱心に講演を聞き、フローチャートを書き取りながらモデルディベートを聞いた。立論を作成する際には机間巡視する学生に次々と質問をしていた。

【 本時の実践による効果 】

普段なかなか見ることができない大学生の本格的な試合を実際に見れたことが印象的であり、良い経験と捉えている生徒が多数いた。ディベートへの関心が高まり、どのクラスでも積極的な試合が展開された。ディベートでは大きな声で奇をてらった発言をすると評価されるというわけではなく、証拠資料に基づいた根拠を論理的に述べることこそが大切であるということを、佐々木先生と学生たちが繰り返し伝え、生徒たちはそれを理解する貴重な経験をした。

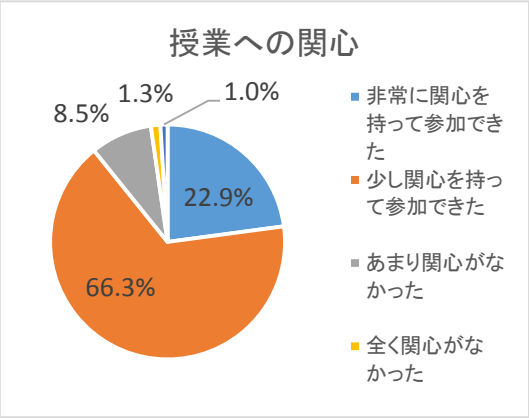
【 まとめ 】

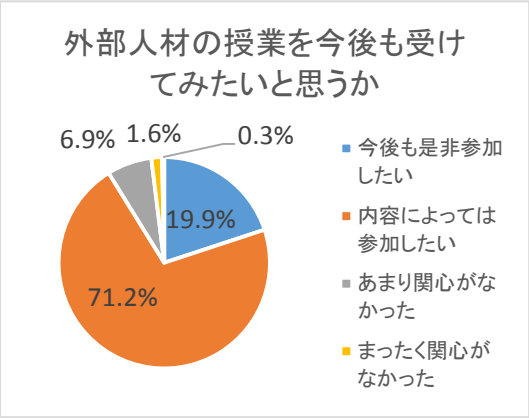
佐々木先生は今回のディベートの授業のために学生たちと度々打ち合わせをして、学生たちの交通費を負担してお越しくださいました。次年度は、37 期がディベートを総合的学習の時間に実施する予定があるということで、また依頼する予定であるということをお伝えしています。佐々木先生の講演と学生による指導は本校生徒がディベートを学ぶ上で大変良かったのではないかと思います。本校の総合的学習の指導のためにお越し下さる方たちが経済的負担をしないような形で実施できればなおよいです。

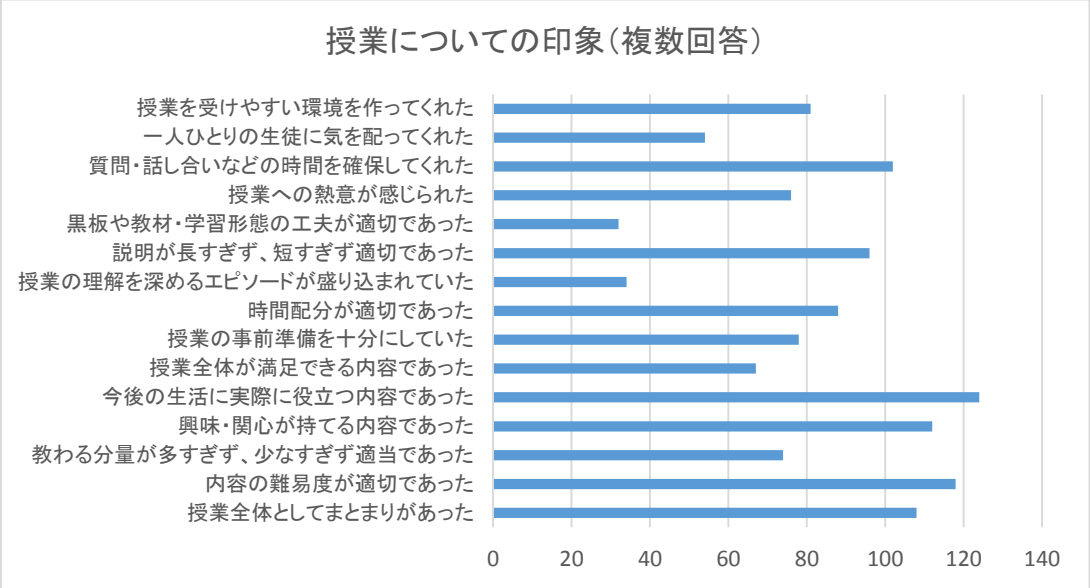
内容については、5 時間でディベートを実施しなくてはいけないということでこのような形にしまし

たが、改良できるならあと１時間分の実施時間を加え、ベストチームによるモデルディベートを体育館などで実施し、審査と講評も全員で聞けたらよいと思います。

◆ アンケート結果







■ 今回受けた授業で、一番記憶に残っていること（自由記述、抜粋）

- 大学生からの評価が適切でわかりやすかった。
- 実際にやってみると上手くイメージ通りにいかず、大学生の方たちが見せてくれたディベートが一番記憶に残っている。
- 真剣に参加すると、事前準備がとてもいるし、相手の意見に「なるほど」と思うところもあった。
- 同じ班の人と協力していいディベートを作ろうとして取り組めたこと。
- ディベートをすることで、時間を意識するようになること。
- 今まで持っていなかった観点をもつことができた。
- 他の人が、積極的に意見を言っていたこと。
- 去年よりも、データ引用などを積極的におこなっている班が多かったこと。
- 人によってそれぞれ色々な考え方があり、同じ題材でもこんなにたくさんの議論をくり広げれるのだと思った。

７）学社融合講座「普段着でできる！気軽に国際交流～ちょっとしたヒントでもっと身近にもっと楽しく!!～」（大通高校）

授業担当教諭：中村　裕子（国語科）

協力者または団体	札幌国際プラザ参事　後藤　道　氏
実施内容	「ﾁｪﾘｱ②後 21」（学社融合講座（札幌市生涯学習センター主催） 「普段着でできる！気軽に国際交流～ちょっとしたヒントでもっと身近にもっと楽しく!!～」
実施学年等	全学年
実施場面	学校設定科目生活教養

【　外部専門人材活用に至る経緯　】

札幌大通高校が教育課程に位置付けて行う「学社融合講座」として、札幌市生涯学習センター企画の講座を実施していることから、その講座の講師を札幌国際プラザ（以下プラザという）と連携し、人選にあたってはプラザの協力を得ながら元プラザ職員の講師にお願いした。

【　実施計画の概要と実施の目的　】

本講座は、前半（10-11 月）に、街中で触れるアイヌ文化をテーマに、アイヌ民族の歴史、文化を学び、後半（12 月－２月）には、「普段着でできる！気軽に国際交流～ちょっとしたヒントでもっと身近にもっと楽しく！！～」をテーマに身近な国際交流を考える内容を設定している。

この日程の中の⑩と⑬の回については、授業の目的内容から、自国の文化と他国の文化の違いを理解しあうことが必要であることから、外部人材のほとんどを外国人とした。今回はそのうち⑬についてを試行実践の取組とさせていただいた。

＜講座全体のスケジュールと実施内容＞

日　程	講座内容
①　10/７	自己紹介、自国紹介,アイヌ民族の研究の歴史
②　10/14	現地学習（清華亭）
③　10/21	現地学習（北大植物園）
④　10/28	アイヌ民族の歴史①
⑤　11/４	アイヌ民族の歴史②
⑥　11/11	アイヌ民族の文化
⑦　11/18	まとめ　これからのアイヌ文化に注目するとは
⑧　12/２	自己紹介、自国紹介、札幌の国際交流・姉妹都市
⑨　12/９	国際交流を普段着で･･･ホームステイのすすめ
⑩　12/16	ワールドカフェⅠ　地域の多文化（お隣さん）
⑪　１/13	世界国巡り～さまざまな国を知ろう
⑫　１/20	国際協力　貿易ゲーム
⑬　１/27	ワールドカフェⅡ　地域で災害、どうしよう？
⑭　２/３	やさしい日本語でコミュニケーション
⑮　２/24	ラナルド・マクドナルドを知っていますか？

【　外部人材を活用した授業の具体的な流れ　】

メイン講師がワールドカフェ形式を用いて、ファシリテーターの役目を担当し、外部から学生７名の講師が、災害が起きた時を想定するグループワークにおいてグループ内のファシリテーターの役目を担いながら、参加者としても意見を率直に出し合った。

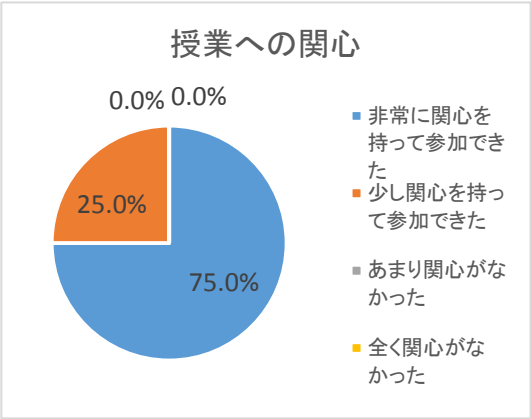
※当初は外国籍の学生を招へいする予定であったが、都合が合わず、日本籍の学生を招へいすることになった。

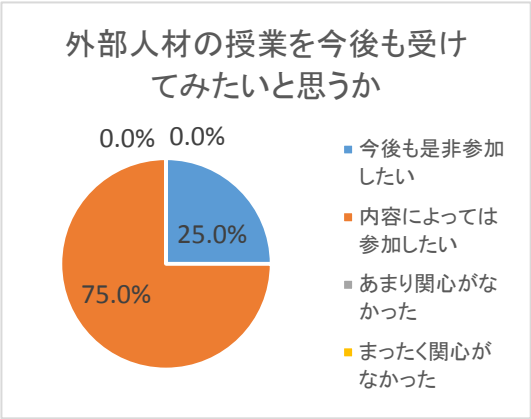
【　本時の実践による効果　】

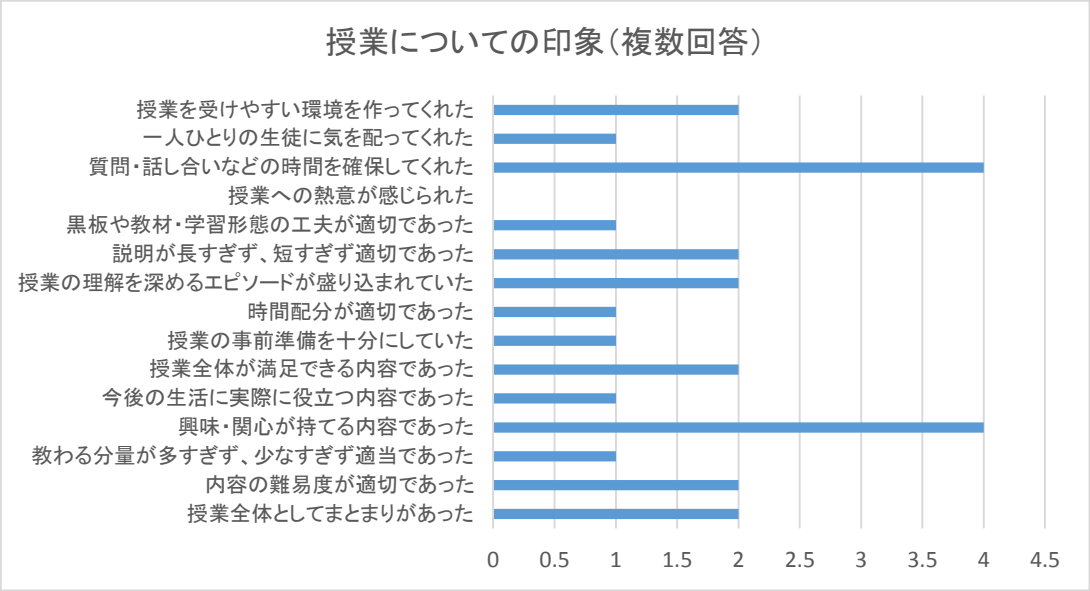
外部人材として日本の様々な地域出身の学生が、グループワークの中でそれぞれの体験を語り、災害に対する心構えの違いが明らかになり、札幌の高校生には大きな刺激となった様子であった。

さらに、災害時や避難時の外国人に対する日本語での情報の伝え方を考えた場面では、より易しく、より短い表現で伝えることがいかに大切か理解できたようであった。

◆　アンケート結果







■　今回受けた授業で、一番記憶に残っていること（自由記述、抜粋）

- 台湾の方が、銭湯に入ることに驚いたそうだが、私たちは普通に感じていたので驚いた。
- 留学生の人とコミュニケーションをとったこと。
- 外国の方２人から独特な文化を聞けて良かった。

８）第 10 回 DORI-TRPG 研究会（大通高校）

授業担当教諭：佐々木　大輔

協力者または団体	社会人 TRPG サークル「DNP_TRPG 部」（代表者：五十嵐正博）
実施内容	アナログゲーム（TRPG）を用いたコミュニケーショントレーニング
実施学年等	１～４年次の希望者　（13 名）
実施場面	その他（総合的な学習の時間におけるコーピングリレーション等につなげる学習）

【 外部専門人材活用に至る経緯及び目的 】

本校には、不登校経験や発達障害など、様々な理由で対人関係構築に困難を抱えている生徒が多数在籍しており、彼らをサポートするために、１年次生徒を対象に「コーピングリレーション」という社会的スキルトレーニングの授業を実施している。しかし、実施回数が年間 10 回程度であることや、２年次以降は開催されない点から、これらのサポート機会を増やす必要性に迫られていた。

そこで、テーブルトーク・ロールプレイング・ゲーム（以下、「TRPG」と略す）というコミュニケーションゲームを利用する事で、コーピングリレーションの補完、コミュニケーション能力向上支援を行う。また、１年次生徒については残ったコーピングリレーションへの動機付けとして作用させる。

TRPG を実施するに当たっては、ルール把握やシナリオの準備など、TRPG に触れたことのない教員が短期間で指導可能なものではなく、TRPG に慣れ親しんでいる外部協力者の存在が不可欠であった。DORI-TRPG 研究会は、平成 23 年度に北大 RPG 研究会の協力により第１回、平成 25 年 11 月までに９回を実施。しかし、北大 RPG 研究会による協力は第９回で終了したため、今回は北大 RPG 研究会ではなく、DNP-TRPG 部の協力により、第 10 回を実施した。

【 実施計画の概要と実施の目的 】

実施の目的は、高機能広汎性発達障害を持つ生徒も多数在籍していることから、それらの生徒への直接的なコミュニケーション支援として、またコーピングリレーションへつなげるための間接的な支援とすること。

今回の実施にあたり、参加生徒は 10 月上旬より HR を通じて募集し、申込は 15 名、当日出席者は 13 名だった。実施協力者は社会人 TRPG サークル「DNP_TRPG 部」に所属・協力する６名であり、３種類のゲームに各２名ずつ分かれて実施。なお、その２名は進行役であるゲームマスターと、プレイヤーとして参加し、生徒を同じ目線で助けるアシスタントとなった。

今回のゲームは市販ゲーム「ソードワールド 2.0」「Dungeons & Dragons 5th edition」「クトゥルフ神話 TRPG」の３種類。ゲームは生徒の希望をとり、配慮の必要な生徒が偏らないように、生徒に発表。

【 外部人材を活用した授業の具体的な流れ 】

〈　事前の活動　〉

各 HR 教室、保健室、職員室前廊下、進路スペースにて告知・募集開始

応募生徒に個別に社会的スキル尺度 KiSS-18（Kikuchi's Social Skill Scale・18 項目版）の実施。

〈　当日の時程　〉

11:30-12:30	実施協力者打ち合わせ（配慮の必要な生徒の情報共有）
12:30-13:00	開会式（ゲーム紹介、実施ゲーム決定を含む）
13:00-17:00	ゲーム実施。
17:00-17:30	閉会式（生徒による感想プレゼン、アンケート回答含む）

【 生徒の反応・感想など 】

DORI-TRPG 研究会にて毎回とっているアンケートの今回分データを確認してみると、ほぼすべての生徒が「面白かった」という反応であった。これは、今回の取り組みが生徒の興味を引くものであり、自発的に参加させるための誘因が十分であったことの証明であろう。ゲームでの活躍と面白さの間には相関はなく、活躍できなくても面白さが損なわれないことを示している。このことも、ゲームの誘因を構成する要素の一つだと考えられる。

生徒はゲームの難しさや活躍の度合いとは無関係にゲームを楽しんでいたということが示された。

【 本時の実践による効果 】

参加者から事前にとった社会的スキル尺度 KiSS-18 の結果からは、高校生平均値とほぼ違いがないように思える。しかし、アスペルガー症候群のような発達障がい傾向を抱える生徒はメタ認知能力が低く、自分が行っているコミュニケーションの不適切さに気付かず、高い自己評価をしてしまうことがある。今回も、同様の傾向があると診断、もしくは診断が下っていなくても、担任および周囲から同様と目される生徒が多かった。その寄与分を差し引くと、平均値以下の値になるだろうと推測できる。すなわち、今回の取り組みは当初の目的に合致した、コミュニケーションの不得手な生徒が集まっているといえる。

DORI-TRPG 研究会アンケートの今回分データの中で、普段との比較の結果からは、生徒は普段以上に他者の考えを気にしていたことが把握できた。

今回の実践において、参加生徒は普段以上に能動的にコミュニケーションをとろうとする姿勢が見られた。出席義務のないゲームの会で、楽しみながら、コミュニケーションの訓練を行うという目的は達成されたと考えられる。

今後は、この効果を定着させるため、過去におこなわれていたと同様の年数回の実施を目指していきたい。

【 まとめ 】

今回の実施の目的は、生徒にとって身近で拒否感の乏しいゲームを使用し、楽しみながらコミュニケーショントレーニングを行うことである。そして、1 年次については、本校の総合学習でおこなわれているコーピングリレーションなど、コミュニケーションの訓練をおこなう授業への動機付けをおこなうことである。

アンケートの結果を見ると、「楽しみながらコミュニケーショントレーニング」という側面は充分満たしていたと考えら得る。また、参加した生徒たちも、それが必要であると思われる者が参加し、今回の会の意義は充分満たされていたと考えられる。

ただし、コーピングリレーションなどへの動機付けに関しては検証できておらず、また、一定の頻度を保っての繰り返し実施についても、まだ未計画である。これらは今後の課題であり、長期的な調査および外部との密接な協力関係の構築が重要であると思われる。

これらの課題を克服できるよう、今後の実施を計画していきたい。